

浪江町一復興への道筋と24のプロジェクト

2015年9月

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究）開発
コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン 研究開発プロジェクト
「広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成」

コミュニティデザイン・運営グループ

早稲田大学 都市・地域研究所
早稲田大学創造理工学部建築学科 佐藤研究室

浪江町－復興への道筋と24のプロジェクト



なみえ復興塾

まちづくり NPO 新町なみえ

協力：浪江町

早稲田大学都市・地域研究所＋都市計画佐藤滋研究室

2012年8月16日

本報告書に記載されているプロジェクトは、「まちづくり NPO 新町なみえ」主催で、二本松市・南相馬市・東京東雲地区で開催された「なみえ復興塾」におけるワークショップで、浪江町民の皆様の意見交換や提案をもとにとりまとめたものです。この経緯は巻末にあるとおりです。

記載されているプロジェクトの実現可能性、技術的検討は未だ不十分であり、原発の収束状況や除染進捗等に応じてさらなる検討が必要です。しかし、ここでは、現在の状況を踏まえたうえで、浪江町復興への町民の思いをできる限り具体的なイメージとして描くことを心がけたものです。今後、引き続きワークショップなどをおしてこれらを発展させ、その実現性を踏まえつつ、より具体的で魅力あるものに高めたいと考えています。

なみえ復興塾での模型を使ったワークショップや、プロジェクトのイメージについては、早稲田大学都市・地域研究所＋佐藤滋研究室及び芝浦工業大学志村秀明研究室の協力のもとで進めて参りました。この長期的な被災地の復興を継続して成し遂げる為に、支援・協力する側の専門家を現場で育てることも重要です。学生や若手研究者が叱咤激励を頂きながら成長する貴重な学習の場となっていることも、付記します。

また、これまでさまざまな地区において様々な提案がされており、それらを参考にさせていただいています。全ての先行提案等を、注記することはできていないかと思いますが、ここに記して感謝の意を表します。

ここでの提案を今後の浪江町民の皆様の生活再建やコミュニティの復興に向けた検討や、浪江町復興計画の策定などにおいて、参考にして頂ければ幸いです。

2012 年 8 月 16 日

浪江町―復興への道筋と24のプロジェクト

あの大地震、大津波とそれにつづいて起こった東京電力福島第一原子力発電所事故によって私達が故郷を追われ、色々な道筋をたどってある人は仮設住宅で、ある人は借上げ住宅での生活を続けて1年6か月になります。現在浪江町民は、約14,000人が県内に、約7,000人が県外それも45都道府県にまたがっており、この事故による被害の大きさが今更ながら実感される次第です。

私達の周りの皆さんが以前の日常を取り戻している中、私達も奇妙な小康状態の中にありますがその中身を見ますと、将来に対する不安、現実の問題として、現在の生活をいつまで続けなければならないのか、又その先は…等将来の生活設計を立てることが困難な人が増えてきております。その要因は、賠償問題が進展していないこともありますが、生活設計を立てるための確かな情報の提供がなされていないもどかしさから来ているといっても過言ではありません。

勿論、一人一人浪江町に対する思いも違いますし、年代、職業等によって将来の方向も一様ではありません。それでも自分達で、ふるさと浪江町の復興を考えたい。そのような場が欲しいという声が上がってきました。

私達が「復興塾」を立ち上げましたのもまさにこの点にありました。幸い私達は早稲田大学佐藤滋教授と研究室の皆さんの全面的なご協力を頂く事ができ、3月来、二本松市を中心に数回にわたりワークショップを開催し、さらに南相馬市、東京都東雲にも枠を広げ、より多くの町民の皆さんの意見を集約し、まとめたのが今回の24のプロジェクトです。1つ1つのプロジェクトについてはもっと検証し、掘り下げなければならないものもありますが、このような形で私達の思いを皆さんに提示させていただくことにより、これまで漠然としていた浪江町の復興が目に見える形で捉える事が出来、皆さん一人一人の生活再建に対する思いもより具体化するものと思われます。この「まとめ」を是非お読みいただき、また色々な会合等でお使いいただくことにより浪江町の復興をより深く、より普遍性のある復興の一助になれば幸いです。

次の言葉が現実となることを祈っております。

『未来の教科書の一ページに、浪江・福島・東北・日本の復興を！』

最後に今回の『24のプロジェクト』をまとめるにあたり、温かいご協力をいただきました早稲田大学佐藤滋教授と研究室の皆さん、ご参加いただき真剣な討議をしていただいた塾生の皆さんに心より御礼申し上げます。

なみえ復興塾塾長 原田 雄一
NPO 新町なみえ理事長 神長倉 豊隆

浪江復興まちづくり・協働でのデザインの前提

条件が定まらない中で、具体的なデザインを描くことについて

今、浪江町がおかれている状況は極めて流動的です。計画やデザインは「計画条件」が定まらなければ進められないというのが従来の考え方です。福島県全体も、原発事故の収束や放射線の問題に象徴されるように、基本的な条件が見通せない状況です。しかも状況は刻々と変化します。しかし、だからといって、「具体的なデザインは描けない」では、前に進めません。いくつかの将来像を協働してデザインし、望ましい道筋について共有することができれば、その実現のために何をすべきかを考えることができます。将来像を共有し、そこから逆に照射して、今、何をすべきかを考えてみたいと思います。

町の復興計画を補完して具体的な復興像をデザインする

現在作成が進んでいる浪江町としての正式な復興計画は、関係者の合意や制度的、法的な裏付けを確認しながら、着実な合意の元で作成されています。本冊子に示した復興塾でのデザインは、町で作成中の計画と基本的な考え方を共有しつつ、復興塾に集まった皆さんの間で繰り返し議論し、ワークショップでの作業をとおして、おおよそ共有されたプロジェクトを具体的にデザインしたものです。ですから、具体的に描いているデザインも、土地の権利者の方々や関係者の承認や合意を得ているものではありません。

しかし、具体的なデザインを描いてみることで、今後、さまざまな具体化のためのきっかけや話し合いの材料となるものと考えています。荒唐無稽に無責任に描いたものでは決して無く、資料に示したように、高い志を持つ多くの町民・関係者の熱心で真剣な話し合いと共同作業によって描かれたものです。

原子力発電所事故の収束と安定化がすべての前提

ここで描いたデザインは、現在進行中の原子力発電所事故の収束が進み安定することが前提です。完全な廃炉を待っていたのでは復興のスタートはそれまで待たなければなりませんし、拙速な復興事業は後が続かないアリバイづくりになってしまうかもしれません。本冊子で元の浪江町に関して描いたデザインの前提は、「原子力発電所事故の収束と安定化」です。このことの判断は、浪江町としての公式な決定によることと、考えています。

放射線量が順調に減少することを前提に、仮の設定で描いた道筋

放射線の人体への影響は、科学的にも明確な基準が無く、放射線量の減少は自然減衰、除染によるものなどさまざまです。国・県・町は、住民の居住に関して、さまざまな条件を勘案して基準を決め判断することになります。それに対してそれぞれの町民がどのように対応するかは、それぞれの町民の判断に任されます。そして、人体への影響は、年齢などによっても異なるとされていますし、個人によって帰還への思いも異なります。「高齢者だけが帰れる復興では困る」、「せめて高齢者が暫定的にでも帰還して、一日でも早く復興の道筋をつけたい」、「若者も帰れる条件を実現すべきだ」等々、さまざまな意見があると思います。

現時点では明確な見通しが示されていませんが、ここではあくまでも、さまざまな資料から妥当と思われる時期を仮定して、4つの時期に分けて具体的な年限を記しています。しかしこれは、「あくまでも仮定」であり、今後、町による方針が明確になった時点で、それにあわせることになります。それぞれの期間に示した最も早い時点は、全てが順調に進んだ場合の最短の時期、そしてその期間は、できれば描いたプロジェクトをこの間に完成させたい、少なくとも着手はしたいというものです。

状況に対応して、将来像と道筋をデザインし続ける

復興の計画は、全て事前に決めきるのではなく、状況の変化に応じて必要なら追加し、詳しくしたり、あるいは修正も必要になります。大事なことは、描いて共有している将来像のデザインと道筋に対して、その時々で、常に検証して、確認し、共有したデザインを実現するように行動することです。そして、その過程でデザインを描き直すことも含め、実行しながら協働でデザインをし続けることです。そのためには、常に見直し検証し、協働でデザインし続ける仕組みが必要です。町民や関係者が誰でもいつでも参加できる勉強会やワークショップを重ね、共有されていた道筋の進み具合を検証しながらデザインをし続ける。このような過程とともに復興は進むのです。

町民による絆と共同の組織を中核に、地域協働で復興を実現する

浪江町は今後しばらく、町民及び内外の絆によって支え合いながら、長い復興の道筋を歩むことになります。この過程では、例えば、役場行政と民間企業だけでなく、町民が協働で土地を管理しまちづくりを進める「まちづくり法人」や、さまざまな産業別の組織、あるいは産業振興のための協同組合、制度融資の受け皿や新たな経営体になる企業グループ、さらにはNPO法人や公益法人などの活動が極めて重要になります。すなわち、ここでのデザインや提案は単に行政に提案するというものではなく、行政にも町民にも、町外の方々にも、そして以上のような共同の組織に対しても「このような復興像とシナリオはいかがでしょうか」と、呼びかけているものなのです。

描いた夢はいつか必ず実現する、希望を描かなければ何も実現しない

毎回のワークショップが終わった後で、「これは夢ね。現実 is 厳しい。」という声がしばしば聞かれました。しかし、夢が共有されれば、現実からこの夢への橋渡しをさまざまな行動を通して進めることができるのです。協働して描いた夢と希望は、協働していつか実現することができると信じて、具体的な像とそこに至る道筋をデザインし続け、一步一步行動に移しましょう。

ここに描いたデザインは、浪江復興のための全てを描いたものではありません。復興塾に集まった町民の夢を姿かたちでデザインしたものです。「漠然とした夢」を、具体的に表現することで共有し、実現へ向けての力にすることができます。これからもどんどん夢を描いていきましょう。そして、実現に向かうときには、より具体的なデザインを協働して描きましょう。本冊子で個別の場所で描いたデザインは、例示と考えてください。他にも適応できる場所がたくさんあるはずです。それぞれの地域で、それぞれの場所で、復興のイメージを描くことができるのです。

目 次

復興への道筋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
復興までの四つの段階	2
第一段階 復旧・復興にむけて起点事業を開始する	4
01. 復興公営住宅の建設も含め、それぞれの特性に応じた町外コミュニティの基盤を整備し、避難生活の安定を図る	6
02. 浪江町役場とその周辺を、除染活動や復旧作業・復興事業を統括する前線基地として整備する	8
03. 幾世橋小学校とその周辺を、復旧・復興事業に携わる人や、町民のための宿泊施設、交流の場、一時帰宅センターとして整備・活用する	9
04. 津波に耐えたマリnparkを美しい沿岸地域の象徴とし、除染・修復を行い、ふるさと浪江への思いを紡ぐ場として活用を始める	10
05. 山林と河川の放射能汚染を軽減し、あるいは平野や海に影響を及ぼさないための除染技術の開発・実装実験を行う	11
06. 農地の維持と農業の技術を活かすために米作などを行い、再生エネルギー活用と連携した事業を始める	12
07. 海への美しい眺望を持つ大平山を、震災により失われた多くの人々の魂を鎮める森として、町営墓地を含め整備する	13
08. 大平山や幾世橋～北棚塩地区にかけての高台に眠る埋蔵文化財の発掘・保全を進め、適地で遺跡公園などの整備を行う	14
第二段階 復興のための基盤を形成する	16
09. 町外・町内コミュニティを長期の復興プロセスに耐えられるよう充実させ、相互が連携する交通システム等を構築する	18
10. 復旧事業や海上交通の物流拠点として、そして将来的な漁業再開のために港湾を復旧し、さまざまな活用を可能にする	19
11. 沿岸部で、地盤沈下により浸水している地域を海に戻し、干潟のある豊かな自然を楽しむ場として整備する	20
12. 沿岸部の南北幹線である 254 号線（新・浜街道）を自然豊かな嵩上げ道路として整備し、山側の市街地や集落を守る	21
13. 幾世橋～北棚塩の高台の南斜面に、早期帰還を望む高齢者等のために、多様な居住様式の復興公営住宅等を建設する	22
14. 農地と農業の継続の為に、農業法人を設立して、まとまった土地で農作物を生産しながら、エネルギー自律都市を目指す	23
15. 国道 6 号線の全面復旧、中通りと沿岸部を結ぶ 114 号線の整備、常磐自動車道の開通など、周辺地域との接続強化を図る	24
16. 帰還を目指す町民・企業・農業者・町などが協力して、土地権利を一括して引き受けるまちづくり法人を立ち上げる	25

第三段階	定住に向けて環境整備を進める時期	26
17.	今も残る請戸川南側の防潮堤と河川堤防に町民参加で植樹を行い、自然公園・海と連続性を保った「森の堤防」に再生する	28
18.	幾世橋～北棚塩の台地・南斜面に建設した復興住宅地を台地上及び小高地区に拡張させる	29
19.	豊かな環境を基盤に、再生可能エネルギー等の研究施設、産業施設を本格的に沿岸部に立地させ、新しい産業での雇用を創出する	30
20.	沿岸部に、自然農法や海・干潟での生活を楽しむ簡易作業のための出小屋、滞在施設を持つクラインガルテンを整備する	31
第四段階	条件の整った浪江町に本格的な帰還を進める	32
21.	賑わいの拠点、生活サービスの中心となる中心街の再生プロジェクトを、まちづくり法人をプラットフォームにして計画的に進める	34
22.	常磐自動車道の東側地域を中心に、それぞれの地区の特性に合わせた復興計画を作成、実行し、町全体のバランスの取れた再生を実現する	35
23.	新しい環境エネルギー産業や、地域の自然・文化を活かしたエコ・ツーリズムなど、各種の新規産業を誘致・振興する	36
24.	浪江町などの東日本大震災被災地を主催地に、オリンピックを開催する	37
浪江町復興絵図－第三段階終盤のイメージー		38
なみえ復興双六		40
これまでの取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		43
幹事会・ワークショップ概要		44
ワークショップアンケート結果		46
調査・研究・ワークショップ運営		52

復興への道筋

本冊子は、浪江町復興に向けて必要と考える 24 のプロジェクトを 4 つの段階に分け、その道筋を示しています。

復興までの四つの段階

第一段階 復旧・復興にむけて起点事業を開始する（復旧始動期）
（2013年—2018年）



浪江の復興は息の長いプロセスを進むことになるが、その道筋を歩み始めるために、今直ぐに取りかかるべきことがある。ふるさと浪江への帰還を願う町民の「希望」を紡ぐ8つの起点事業を提案する。(p.4～p.14)

第二段階 復興のための基盤を形成する（復興基盤形成期）
（2015年—2020年）



一時帰宅、短期滞在が活発化するのにあわせて、本格的な復興に向けてその基盤となる道路や住宅などの整備を進める時期である。なるべく早く浪江に戻って過ごしたいと願う、多くの住民のための8つのプロジェクトを提案する。(p.16～p.25)

第三段階 定住に向けて環境整備を進める時期（定住環境整備期）
（2018年—2030年）



「滞在」ではなく「住む」こと、それが実現できてこそ、本格的なふるさと浪江復興の幕開けである。将来の本格的な町民の帰還に備え、定住環境の整備を計画的・戦略的に進める4つのプロジェクトを紹介する。(p.26～p.31)

第四段階 条件の整った浪江町に本格的な帰還を進める
（2025年—2050年）

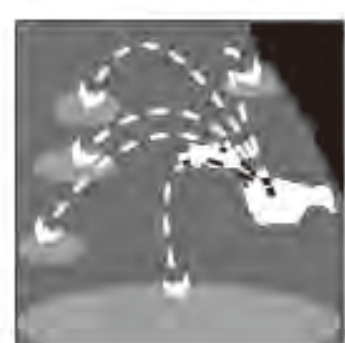


これまでの持続的な取り組みが実って、浪江町への帰還が本格的に進むのがこの時期である。地域全体が希望溢れる未来に向かい、それぞれの地区での復興まちづくりを推進する4つのプロジェクトを紹介する。(p.32～p.37)

第一段階 復旧・復興にむけて起点事業を開始する(復旧始動期) (2013年ー2018年)

浪江の復興は息の長いプロセスを進むことになるが、その道筋を進むために今、なるべく早く取りかかるべきことがある。先行きの見えない避難生活を送る中、ふるさと浪江への帰還を願う町民の、「希望」を紡ぎ始めるプロジェクトの始動である。

除染活動や帰還準備のためのセンターや、一時帰還の際に町民が利用できる短期滞在や交流の場を整備し、ふるさと浪江との繋がりを徐々に回復する施設や仕組みを整えるさまざまな事業を始める。



01.

P.6

復興公営住宅の建設も含め、それぞれの特性に応じた町外コミュニティの基盤を整備し、避難生活の安定を図る



02.

P.8

浪江町役場とその周辺を、除染活動や復旧作業・復興事業を統括する前線基地として整備する



03.

P.9

幾世橋小学校とその周辺を、復旧・復興事業に携わる人や、町民のための宿泊施設、交流の場、一時帰宅センターとして整備・活用する



04.

P.10

津波に耐えたマリパークを美しい沿岸地域の象徴とし、除染・修復を行い、ふるさと浪江への思いを紡ぐ場として活用を始める



05.

P.11

山林と河川の放射能汚染を軽減し、あるいは平野や海に影響を及ぼさないための除染技術の開発・実装実験を行う



06.

P.12

農地の維持と農業の技術を活かすために米作などを行い、再生エネルギー活用と連携した事業を始める



07.

P.13

海への美しい眺望を持つ大平山を、震災により失われた多くの人々の魂を鎮める森として、町営墓地を含め整備する



08.

P.14

大平山や幾世橋～北棚塩地区にかけての高台に眠る埋蔵文化財の発掘・保全を進め、適地で遺跡公園などの整備を行う

町外コミュニティ

01 町外コミュニティの基盤整備

地域全体で行うもの

05 除染技術の開発・実装実験

08 埋蔵文化財の調査

02 除染活動や復旧作業・復興事業を統括する前線基地

浪江町役場

03 宿泊施設・交流の場・一時帰宅センター

幾世橋小学校

06 農地の除染・維持

07 鎮魂の森（町営の墓地など）

マリンパークなみえ

04 ふるさと浪江への思いを紡ぐ沿岸地域の象徴



0

0.5km

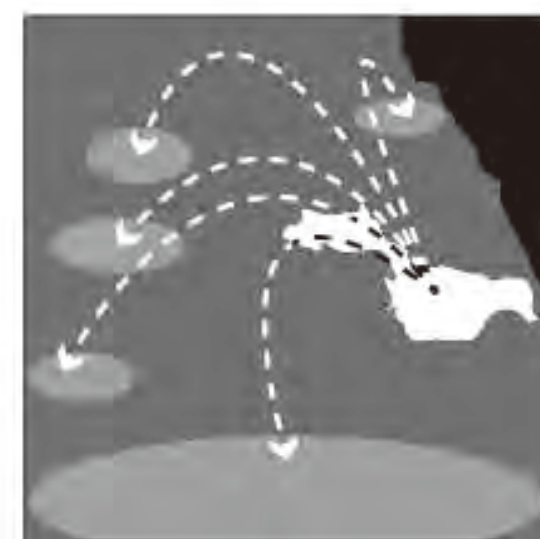
1km

2km

5km

01.

復興公営住宅の建設も含め、それぞれの特性に応じた町外コミュニティの基盤を整備し、避難生活の安定を図る

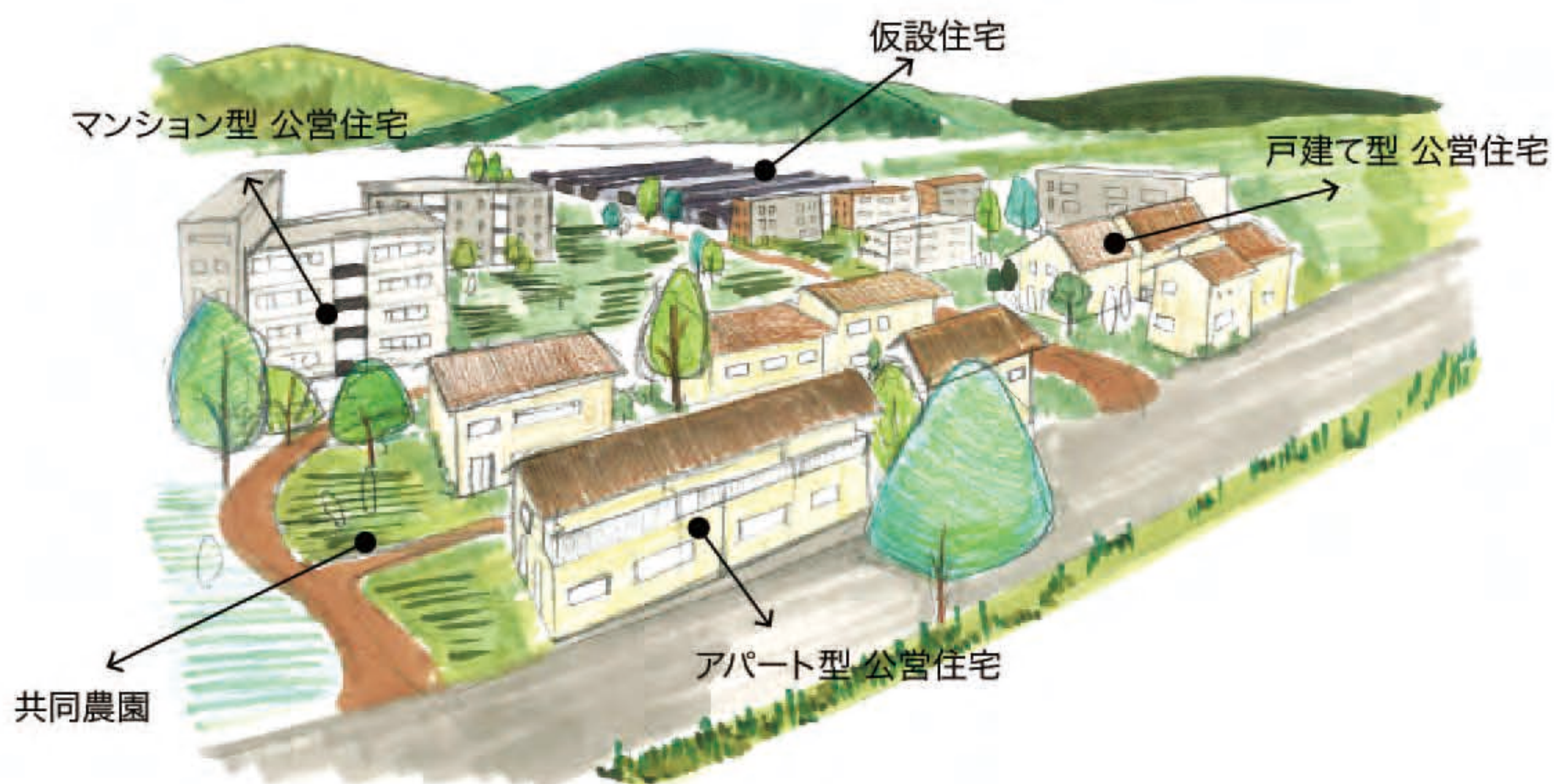


仮設住宅での不安定な避難生活は長期化が避けられない。それぞれの仮設住宅団地では、徐々に住み慣れてコミュニティも形成されつつあるが、問題の多い住環境等の改善は喫緊の課題である。また、仮設住宅団地や避難先の中心商店街、小学校や役場、相馬焼き工房の立地など、多様な条件に対応した町外コミュニティを、復興公営住宅・高齢者のためのケア付き住宅などもあわせて整備し、長期間充実して暮らせる基盤をつくる。

農村に立地する仮設住宅団地では、周辺の未利用の農地を組合などで借り受けて耕作を進めたり、客足が遠のいた温泉旅館の改築で高齢者施設を設けたり、あるいは中心市街地に町民のセンターとなるコミュニティ施設と復興公営住宅を併設する拠点を設けるなど、避難先自治体と連携して多様な町外コミュニティを形成する。

※町外コミュニティ・・・ここでは、仮の町だけでなく、まちなかに拠点を設けたり、現在の仮設住宅に機能を充実させたものも含めて、「町外コミュニティ」と呼んでいる。





仮設住宅団地に復興公営住宅を徐々に建設していく



中心市街地に町民の交流拠点を設ける

02.

浪江町役場とその周辺を、除染活動や復旧作業・復興事業を統括する前線基地として整備する



平成13年12月、自衛隊によって浪江町役場の除染がなされてから、この建物を拠点として復興活動が始めることが求められてきた。この場所を復興の要となる「除染活動」と復興に携わる「復旧工事」の統括拠点とする。ここでは復旧や除染のための重機類の保管、物資の貯蔵、提供が行われる。同時に除染物を保管する仮置き場も周辺地域に計画する。役場は地震の影響が少なく現在は問題なく使用できる状態にある。また国道6号線と114号線の交点にあり周辺都市からのアクセスも抜群である。

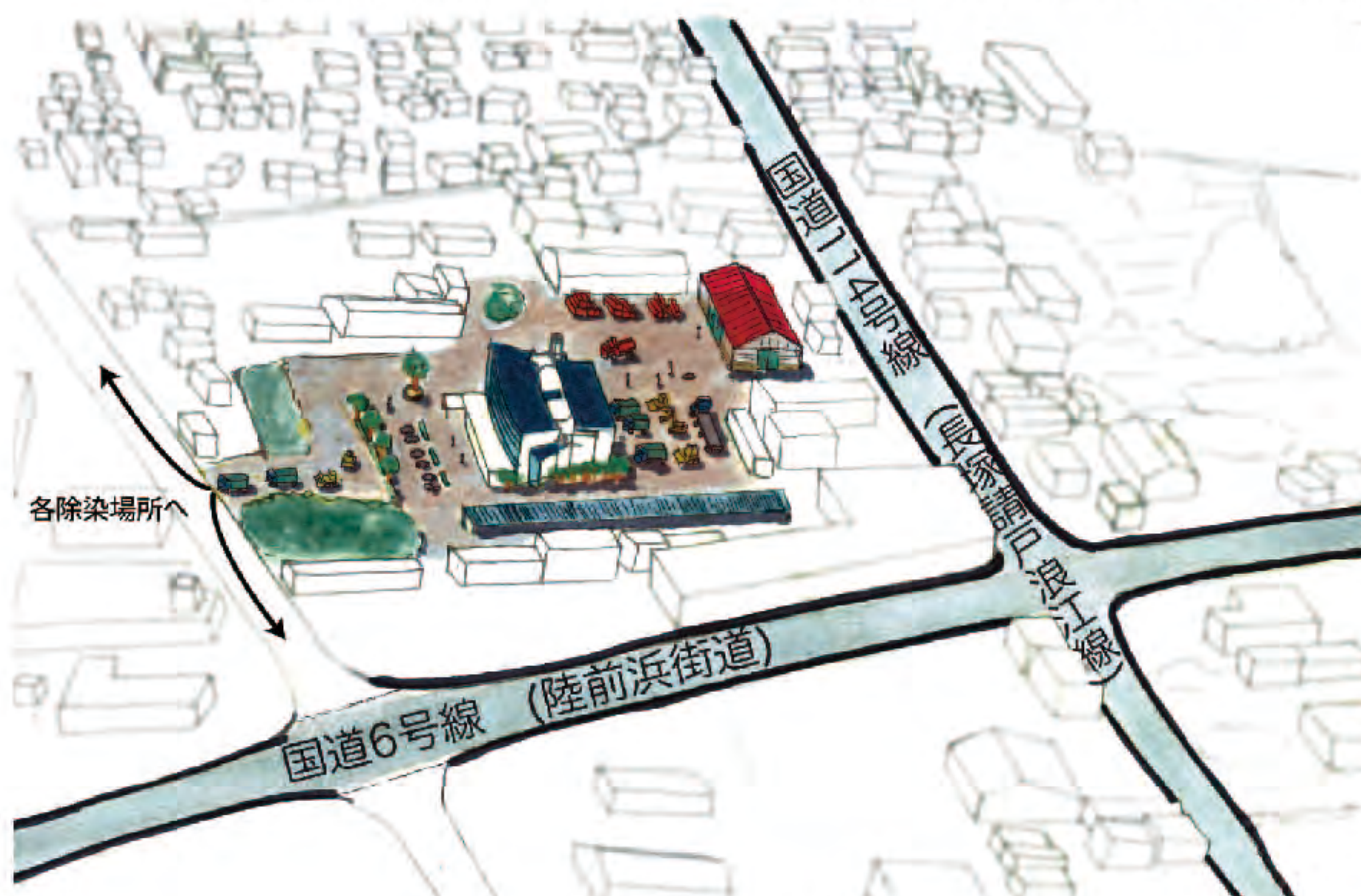
福島第一原子力発電所の状態を常時監視し、その情報を発信、非常時には街中に警報を流す。作業にあたっている人々が速やかに退避できるように、危機管理の拠点の役割も整備する。



浪江町役場の玄関ホール



町役場の屋上から海を臨む ※2012/6/8 撮影



町役場からの人の流れ

各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

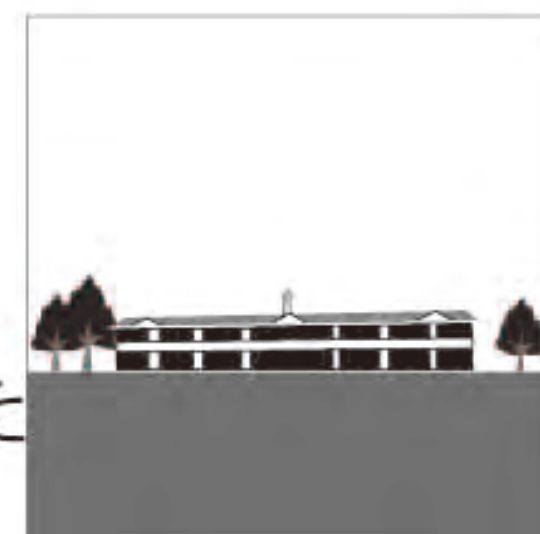
II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

03.

幾世橋小学校とその周辺を、復旧・復興事業に携わる人や、町民のための宿泊施設、交流の場、一時帰宅センターとして整備・活用する



浪江でふと息をつき、町民同士で語らい合う場。それが避難先と浪江を行き来する町民から必要とされている。家の片付けやお墓参りで浪江町を訪れたとしても、高線量区域に自宅を持つ場合や電気ガス水道が通っていない状況では気の休まる暇もなく避難先に戻るのが現状である。

まちに戻ってきた際に安心して立ち寄れる場所として、放射線量が比較的低く、津波の被害にも遭わなかった幾世橋小学校付近を活用する。将来的な居住も見据えながら、この地域の除染とインフラ整備を集中的に行い、幾世橋小学校を一時帰宅センターとし、同時に復興に携わる人々の宿泊施設としても活用する。

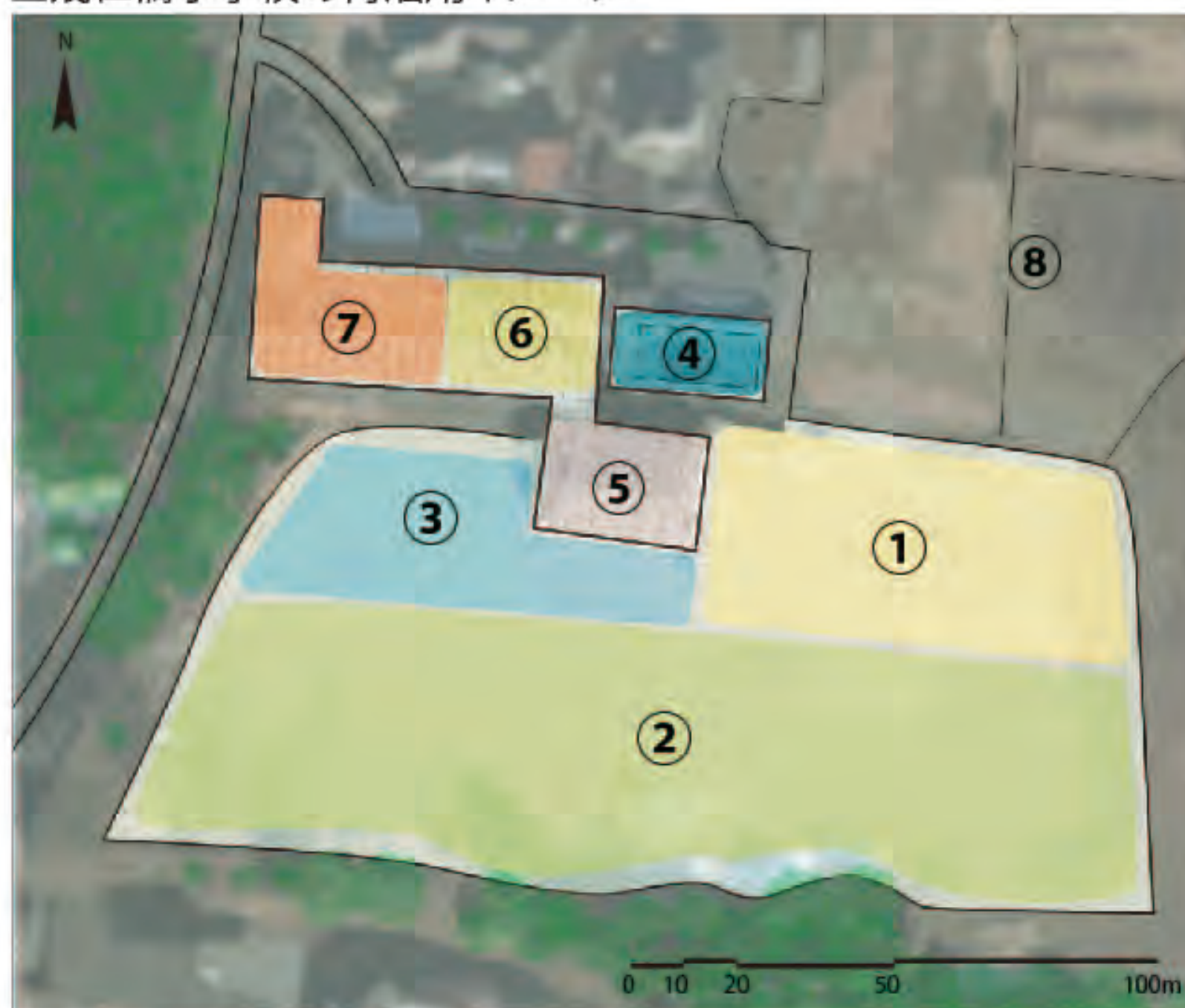


幾世橋小学校の現況写真



利用開始後の幾世橋小学校のイメージ

■幾世橋小学校の再活用イメージ



活用ゾーニング

- ① 広場／遊び場
- ② 共同農園／花壇
一時帰宅時に皆で農地として利用したり、花を植える
- ③ 駐車スペース
- ④ 緊急時用の貯水プール
以前のプールを緊急用の貯水場所として利用する
- ⑤ 集会場
体育館をイベントスペースや集会場として利用する
- ⑥ 一時帰宅者用エリア
一時帰宅した人の休憩、生活スペース
- ⑦ 作業員用エリア
除染や復興作業に携わる人の生活スペース
- ⑧ リザーブ用地

04.

津波に耐えたマリパークを美しい沿岸地域の象徴とし、除染・修復を行い、ふるさと浪江への思いを紡ぐ場として活用を始める



未曾有の大津波に襲われた浪江町の沿岸部には、唯一つ、マリパークが残り、沼地であった歴史を呼び覚ますように干潟の地形に戻りつつある。

マリパークは一部被害を受けているが、構造はほぼそのまま残っており、建物の修繕と周辺の地盤の沈下に対応すれば、再生活用できる。この震災を忘れないためにも、このマリパークを海のシンボルとして残し、ふるさと浪江への思いを紡ぐ場として町民を受け入れ、また、ここを拠点として沿岸部の復旧作業を進めることもできる。



マリパークなみえ



屋上からの眺望

※2012/6/8 撮影



自然を楽しむ拠点としてのマリパークなみえ周辺

0m 1m 5m 10m 50m scale: 1/500

各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

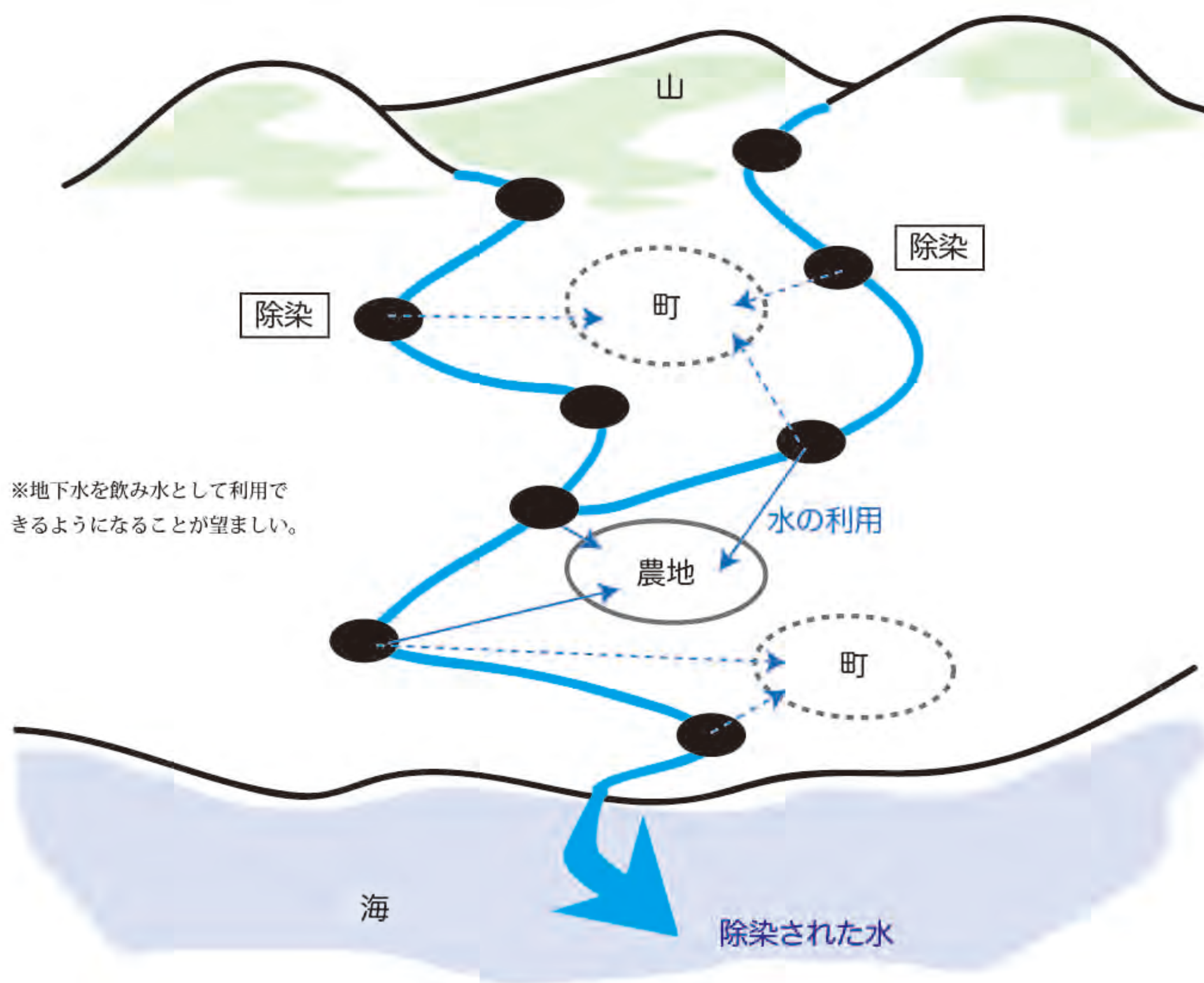
05.

山林と河川の放射能汚染を軽減し、あるいは平野や海に影響を及ぼさないための除染技術の開発・実装実験を行う



浪江町山間部では放射線量が高く、その山を源流とする泉田川、高瀬川を通して線量の低い下流の沿岸部までもがいずれ汚染されてしまうのではないかと心配されている。

現状では有効な除染方法は未だ開発されていない。しかし、このまま放っておけば、雨が降る度に高地の木々や土壌に含まれる放射性物質を下流へと流れ込む水や土砂が運んでしまい、いくら除染をしたとしても再び汚染されてしまうことが考えられる。そのために山林・河川の除染方法、下流への汚染拡散を防ぐ方法を初期段階から継続的に技術開発を実行することが不可欠である。

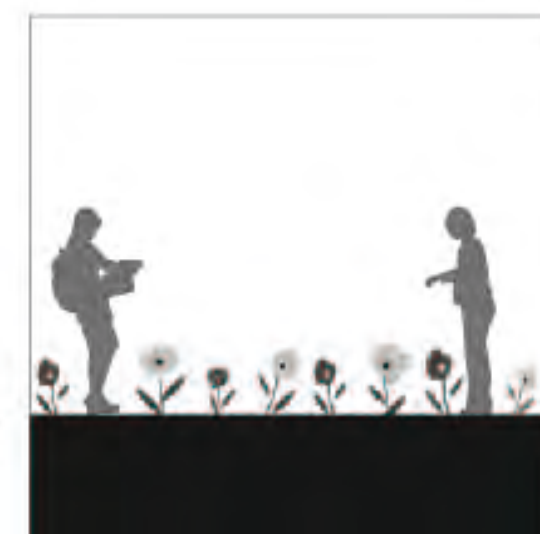


山林・河川の除染を行って汚染拡散を防ぐ

※あくまでイメージです。

06.

農地の維持と農業の技術を活かすために米作などを行い、再生エネルギー活用と連携した事業を始める



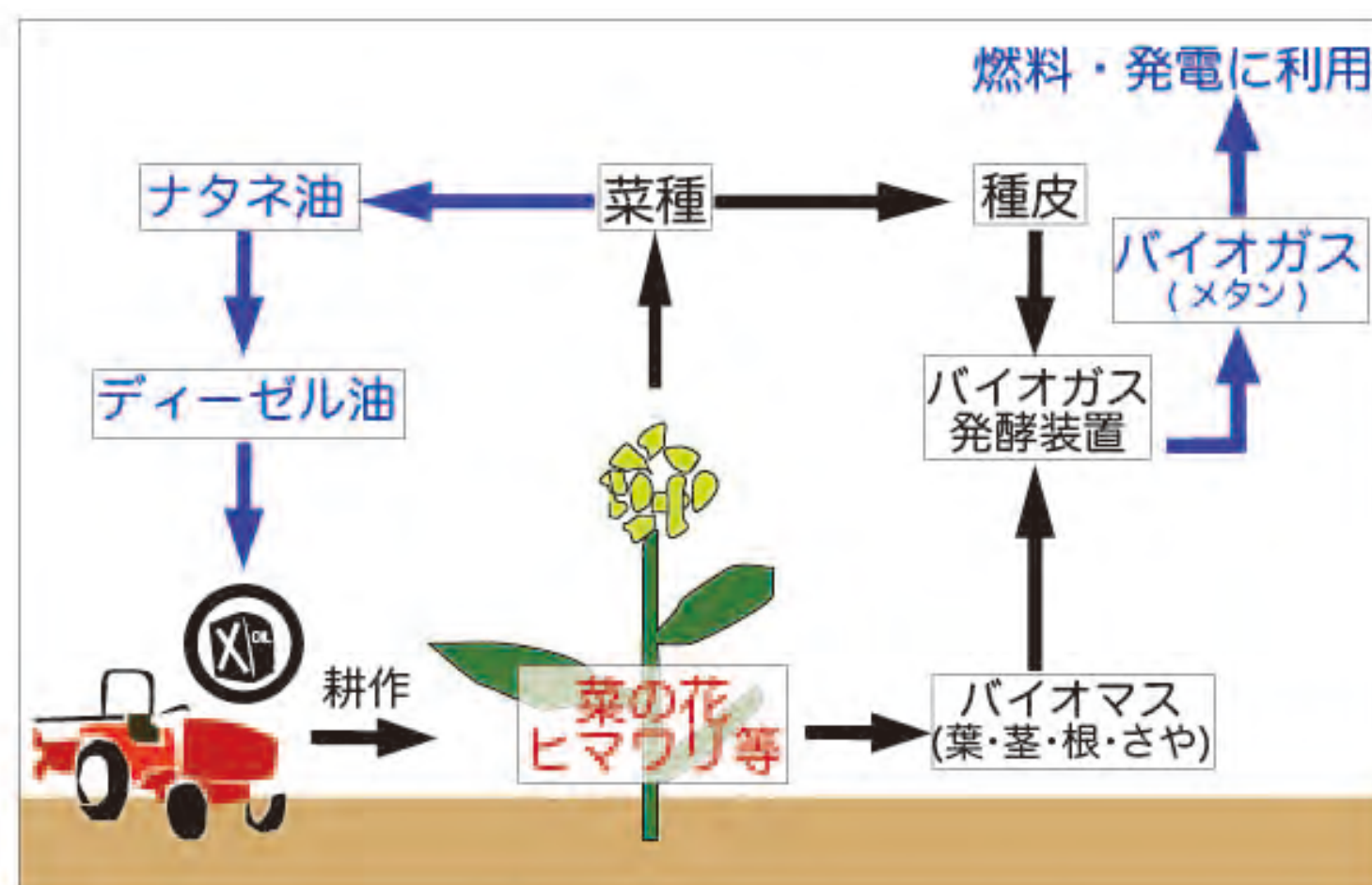
農地は土を耕し続け、作物を育てながら維持していくことが重要である。初期段階では食用目的の作物ではなく、バイオエタノールの燃料として米や花などを育てながら、作物のデータを未来の農業の為に記録していく。再生エネルギーの活用と連携し、農地のケアができる人材・土地の状態・品種による違いなどの情報を集めながら今後の農地利用を検討する。

一時帰宅する住民や復興に携わる人々が農地の継続的な維持・管理をすることで、浪江町には花が咲き誇り、秋には稲穂が実る風景が戻る。これらの風景が人々に復興への希望と勇気を与えてくれる。

■農地の維持とエネルギー生産に資する、花の生産



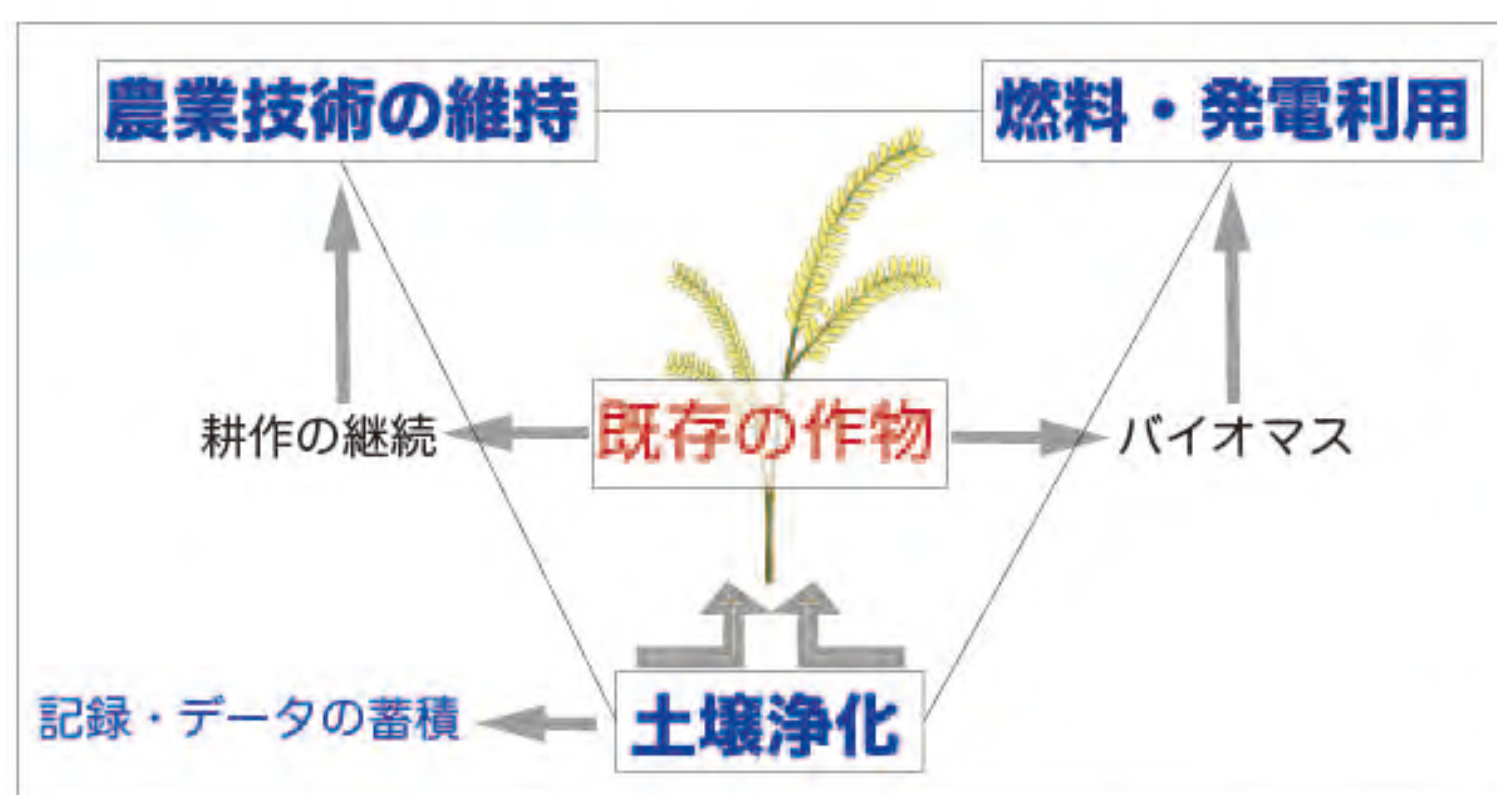
一面に咲く菜の花



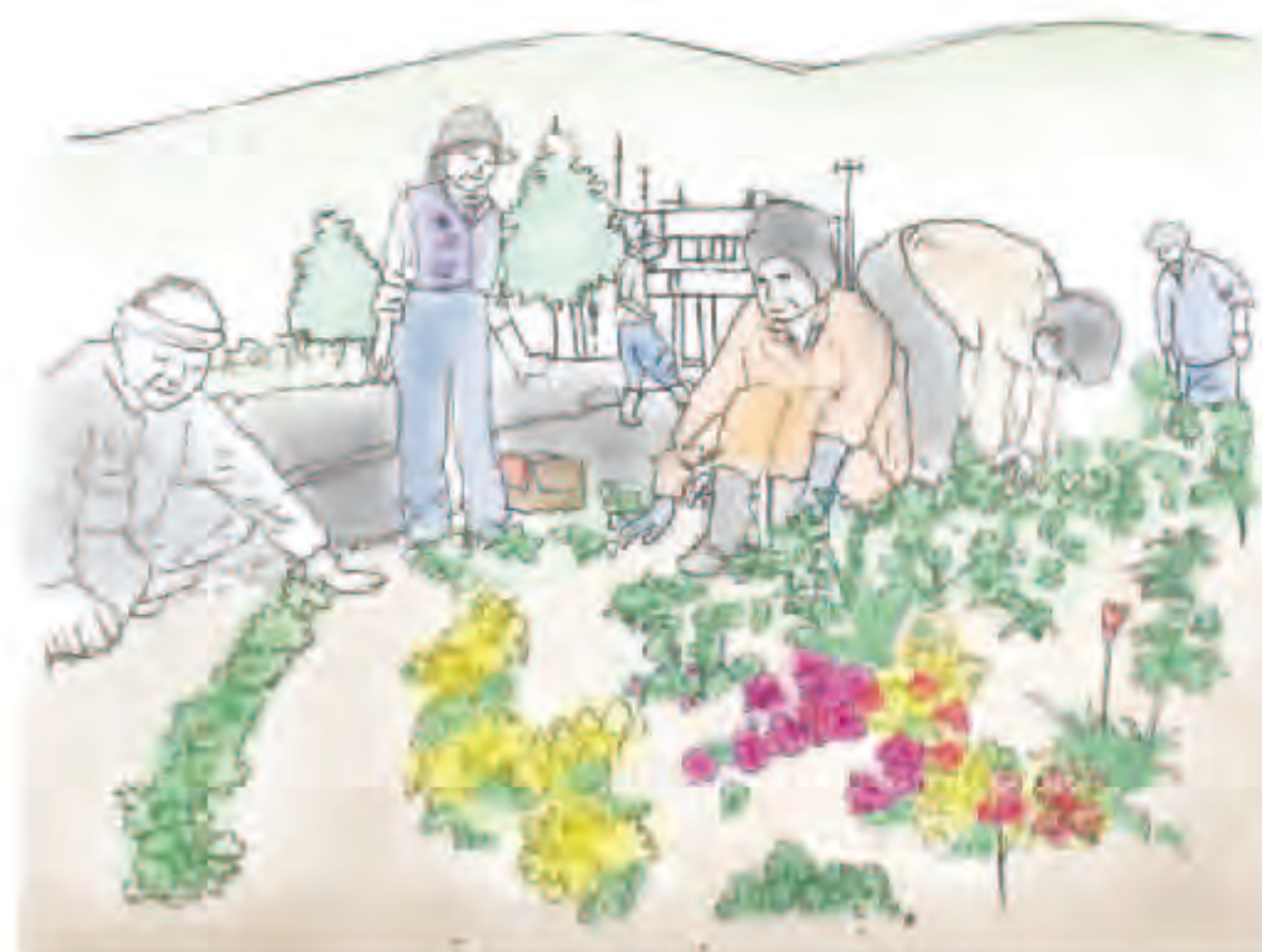
再生可能エネルギー生産を行う仕組み

図は、特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 HP より引用
<http://www.chernobyl-chubu-jp.org/pg156.html>

■既存の生産技術を使った除染と農業技術の維持



米などを耕作し、既存の生産技術を用いて除染を行う



一時帰宅した際に農地の手入れをしていく

07.

海への美しい眺望を持つ大平山を、震災により失われた
多くの人々の魂を鎮める森として、町営墓地を含め整備する



太古より日本では、山と森は、人間の力の及ばない力を秘めた崇拝の対象であり、それ自体をご神体として崇めると共に畏れてきた。大平山も同様にして遺跡や貝塚、古墳が存在する、地域にとって象徴的な山である。

この震災では多くの命が失われたが、神聖な場所とも言える大平山を、亡くなられた方々の魂を鎮める、鎮魂の森として、町営墓地も含めて整備する。毎年3月11日にはこの場所を中心として厳かに慰霊がなされる。

また、以上と調和する居住地としての整備も検討する。



海側から大平山へと続く参道



大平山～請戸小学校～海辺を結ぶ軸線

※「鎮魂の森」は安藤忠雄氏、石山修武氏らによって提案され、宮城県気仙沼市などですでに動き出している。

各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

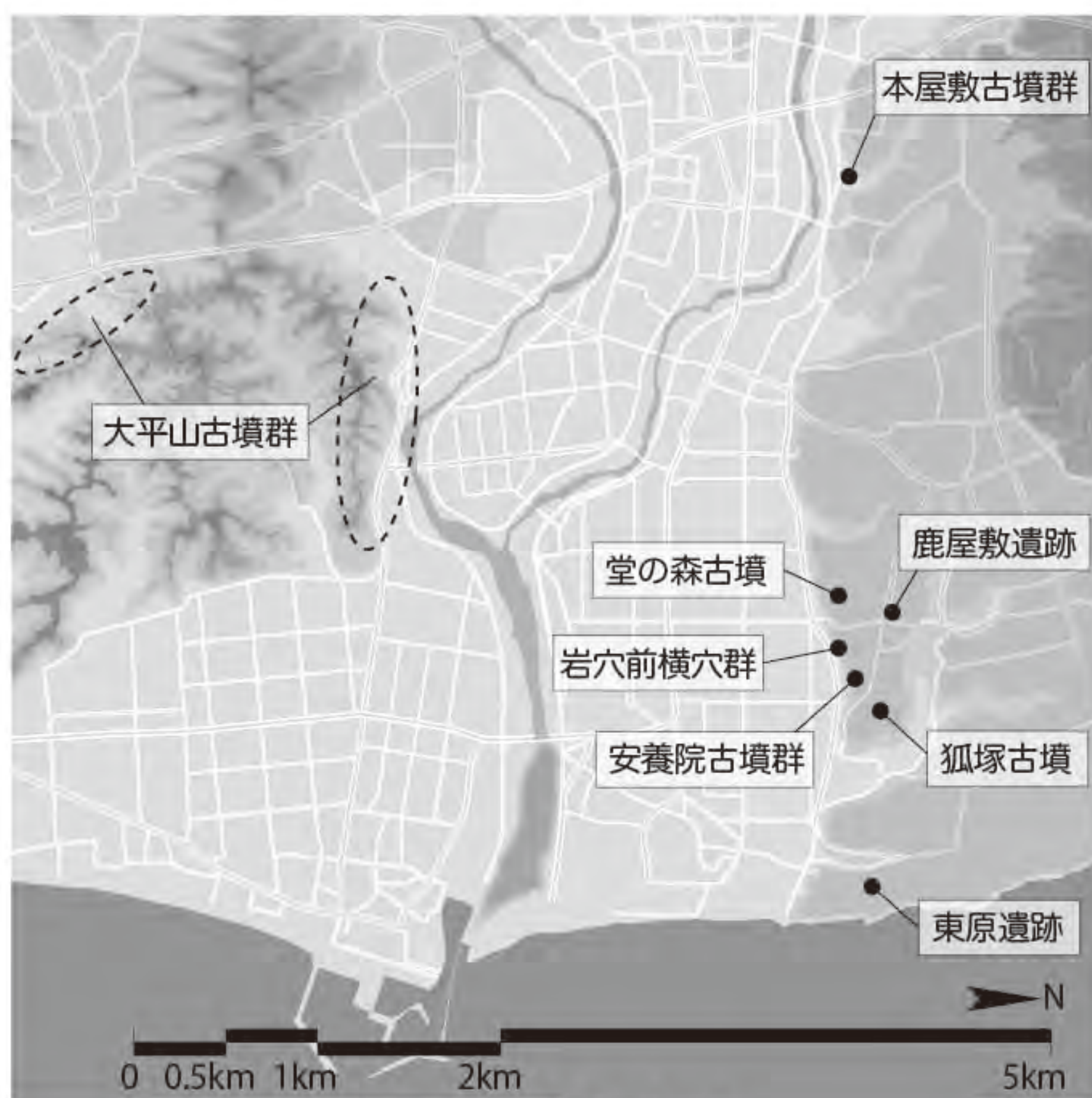
08.

大平山や幾世橋～北棚塩地区にかけての高台に眠る埋蔵文化財の発掘・保全を進め、適地で遺跡公園などの整備を行う



浪江町には、遺跡や古墳・貝塚など、多くの埋蔵文化財が存在する。しかしその多くは手を付けられていないままである。そこで、復興作業を行う前に土中の埋蔵文化財をまとめて発掘調査を行う。

特に、沿岸部の大平山や、北側の幾世橋～北棚塩地区にかけての高台、南側の斜面地を中心に多くの埋蔵文化財が眠っていると言われている。その地域を中心に発掘・調査を先行して行い、重要な場所を保全し、遺跡公園や博物館を整備することを検討する。



古墳、埋蔵文化財等の分布

■浪江町の遺跡の現状

1985年に、本屋敷古墳群の調査が法政大学により行われており、また、2011年には東北学院大学により狐塚古墳の調査が行われている。また、1986年の鹿屋敷遺跡の調査では、古墳時代から奈良・平安時代に及ぶ多数の竪穴住居が発掘された。

しかし、その他は未調査のまま山林として放置されており、まだ多くの埋蔵文化財が存在すると考えられる。また、さらなる遺跡の発見の可能性も考えられる。



狐塚古墳の現状

■遺跡公園や博物館の整備

古墳や埋蔵文化財の発掘を行うことで、合わせて遺跡公園や文化財を展示する博物館を整備することも考えられる。



公園や博物館整備のイメージ

第二段階 復興のための基盤を形成する（復興基盤形成期） （2015年－2020年）

一時帰宅、短期滞在の活発化にあわせた本格的な復興に向けて、その基盤となる道路や住宅などの整備を進める時期である。なるべく早く浪江に戻って過ごしたいと、多くの住民が願っている。その実現のため、長期的な復興を展望し、それに耐えうるビジョンのもとで、美しい浪江の自然風土の回復、道路や上下水道、安全な生活のための嵩上げ道路などの復興の基盤となる施設整備をする。

あわせて、放射線の影響の心配の少ない沿岸地域を中心に、一時帰還、短期滞在・暫定居住のために、新しい構想に基づく住宅の建設を開始する。



09. P.18

町外・町内コミュニティを長期の復興プロセスに耐えられるよう充実させ、相互が連携する交通システム等を構築する



10. P.19

復旧事業や海上交通の物流拠点として、そして将来的な漁業再開のために港湾を復旧し、さまざまな活用を可能にする



11. P.20

沿岸部で、地盤沈下により浸水している地域を海に戻し、干潟のある豊かな自然を楽しむ場として整備する



12. P.21

沿岸部の南北幹線である254号線（新・浜街道）を自然豊かな嵩上げ道路として整備し、山側の市街地や集落を守る



13. P.22

幾世橋～北棚塩の高台の南斜面に、早期帰還を望む高齢者等のために、多様な居住様式の復興公営住宅等を建設する



14. P.23

農地と農業の継続の為に、農業法人を設立して、まとまった土地で農作物を生産しながら、エネルギー自律都市を目指す



15. P.24

国道6号線の全面復旧、中通りと沿岸部を結ぶ114号線の整備、常磐自動車道の開通など、周辺地域との接続強化を図る



16. P.25

帰還を目指す町民・企業・農業者・町などが協力して、土地権利を一括して引き受けるまちづくり法人を立ち上げる

町外コミュニティ

09 デマンド交通などのシステム整備

地域全体で行うもの

16 土地を管理するまちづくり法人立上げ

15 周辺地域との接続強化

114 号線

6 号線

14 農作物の利用

13 早期帰還のための
復興公営住宅

254 号線（新・浜街道）

12 自然豊かな
嵩上げ道路

11 干潟のある豊かな
自然を楽しむ場

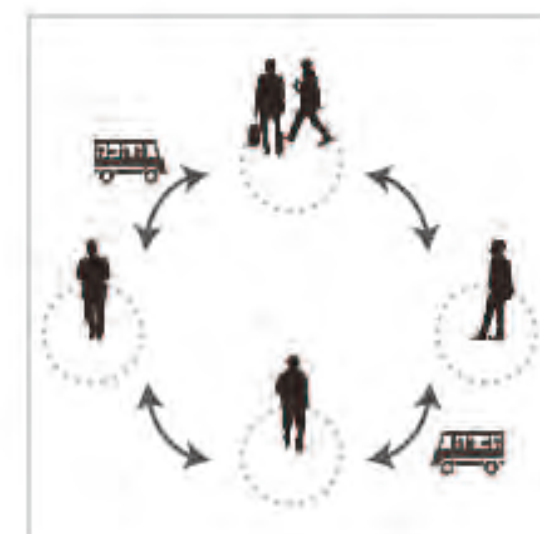
10 物流拠点・漁業再開
のための港湾復旧



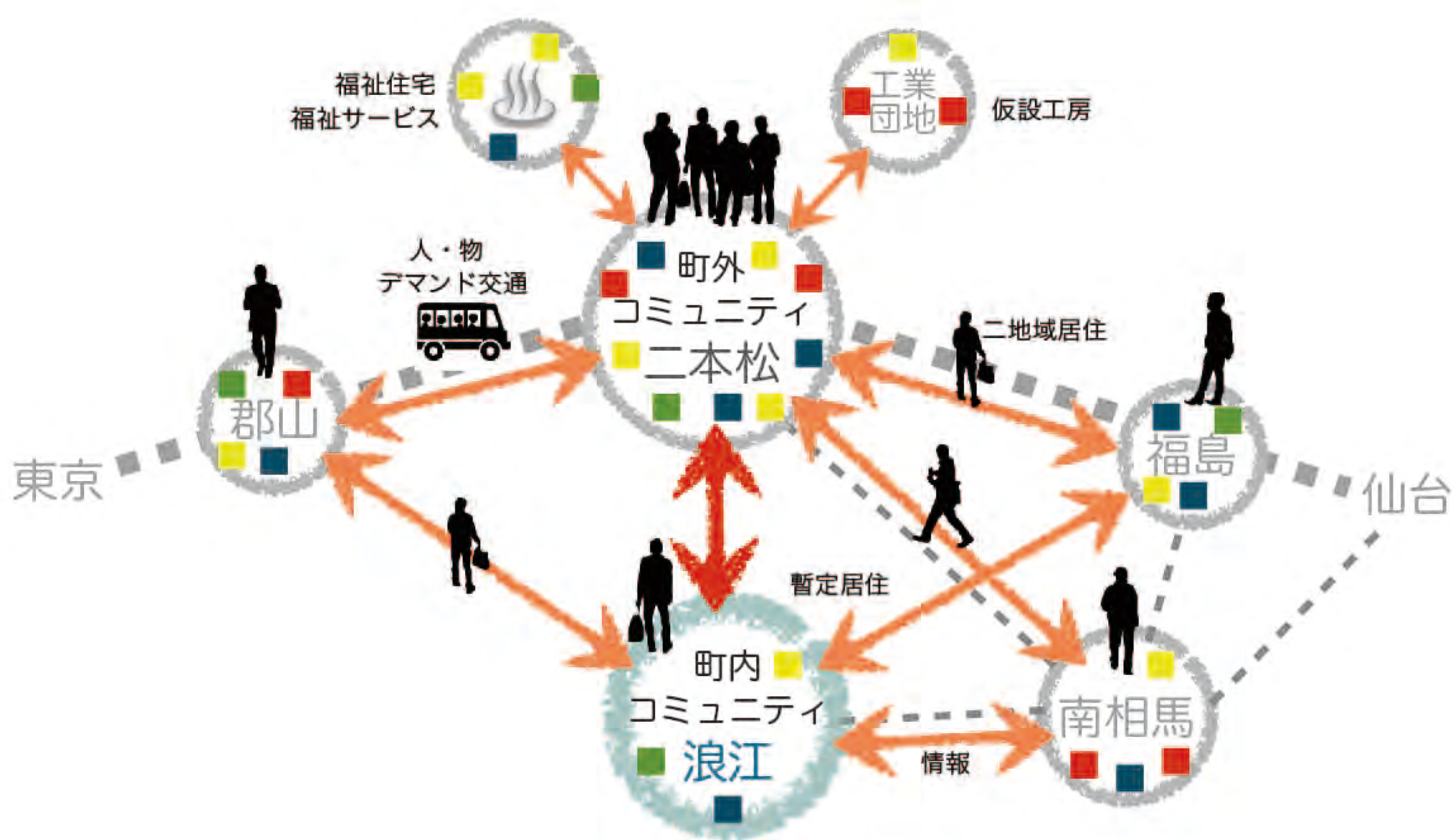
0 0.5km 1km 2km 5km

09.

町外・町内コミュニティを長期の復興プロセスに耐えられるよう充実させ、相互が連携する交通システム等を構築する



多様な町外コミュニティは、浪江町民の生活の拠点として、受け入れている自治体との連携のもとで、生活サービスと環境整備、特に高齢者の福祉サービスを充実させる。徐々に「町内コミュニティ」も前線拠点を中心に充実し、また広域の各地に立地する関連施設とのネットワーク、交流サービスを充実させ、多様な需要に統合して用いられるデマンド交通などのシステムを構築し、強い絆で一つに繋がった『浪江町』を充実させる。



町民の移動とサービスを支える交通・情報システム

※デマンド交通

戸口から戸口へと、好きな場所での移動が可能な交通手段。バスやタクシーなどがある。車の運転などできない高齢者にとっても、安全な交通手段であると言える。 例) なみえe-まちタクシー ぐるりんこ

※町外コミュニティ

ここでは、仮の町だけでなく、まちなかに拠点を設けたり、現在の仮設住宅に機能を充実させたものも含めて、「町外コミュニティ」と呼んでいる。

10.

復旧事業や海上交通の物流拠点として、そして将来的な漁業再開のために港湾を復旧し、さまざまな活用を可能にする



浪江町は請戸港と共に歩んできた。よって、請戸港を浪江町復興の初期段階から整備していくことは重要である。まずは、避難港としての新港整備を先行して行う。

また次の段階として、帰還する住民の方々が本格的に増え始めるのに備え、復旧事業や海上交通の物流拠点としても使えるように整備する。

漁業者は町外コミュニティで継続的に技術の継承、担い手の育成を続けている。いつかこの地でも漁業が再開されるだろう。いつその未来が訪れてもいのように、漁港としても使えるように整備しておく。



■旧港から新港への港湾機能移転

これまでは使われてきた請戸川河口の旧港は、今後は利用しないものとして、新港へと全ての機能を移す。

■魚市場の再建

魚市場は建物の形を残しており、少しの整備で再び使えるようになると考えられる。



魚市場の現状 ※2012/6/8撮影

■漁業関連事業の再開

被災前に浪江町で漁業に携わっていた人々のうち、いつか漁業を再開したいと考えているのはごく少数である。そのような方々が漁業に関連する事業を再開する際には、販路の確保等と共に新しい事業者とどのように連携し、再開していくのが課題となる。

11.

沿岸部で、地盤沈下により浸水している地域を海に戻し、干潟のある豊かな自然を楽しむ場として整備する



かつての地形である干潟に戻っている沿岸部では、小さい砂州に多くの海鳥が羽を休めに集まっている。この風景に象徴されるように、沿岸部は浪江の自然の記憶を呼び覚ます、原風景に戻りつつある。

この地域は、干潟のある公園として自然へ返るのを手助けして、ゆくゆくはマリnparkを拠点として自然を楽しむ場として整備する。一方で、避難のできる丘の広場をつくり災害にも対応する。また、苔野神社も明治期に立地していた位置に再建し、安波祭と復興祈願祭を継続、犠牲者の慰霊と同時に田植え踊りのような伝統文化を継承に資する役割を担う。



各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

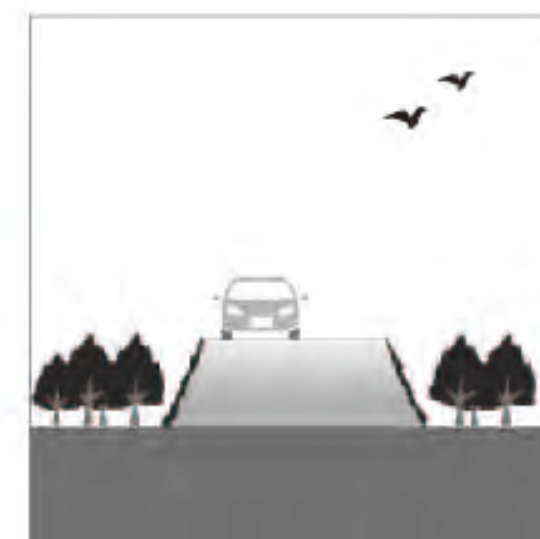
II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

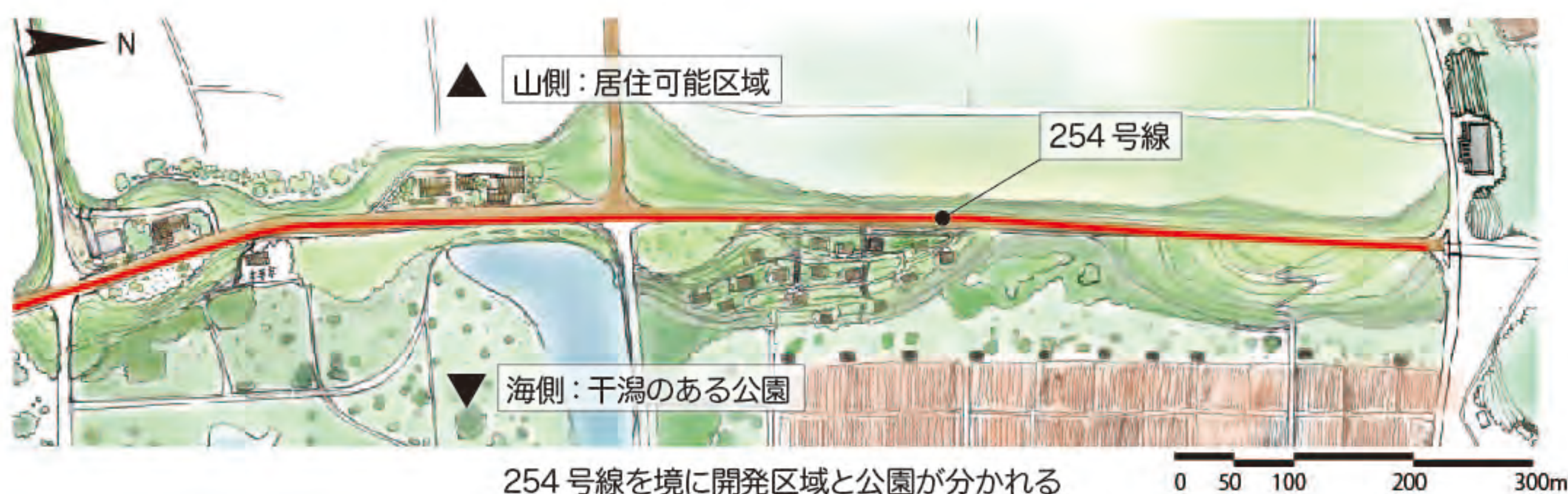
12.

沿岸部の南北幹線である254号線(新・浜街道)を自然豊かな嵩上げ道路として整備し、山側の市街地や集落を守る



254号線はその東西で土地利用を明確に分ける道路である。沿岸部の区切り目を規定し、山側を居住可能区域、海側を干潟のある公園区域に分割している。海側は津波に対して浸水を許容し、南部は農地を中心に、北部は津波や大潮を受け止める遊水池として機能させる。一方で、山側の居住可能区域は254号線を嵩上げし、多重の防潮堤とすることで巨大津波の被害から守る。

その際に重要となるのは山から川、そして海という風景の連続性を保つことである。道路に合わせて木々の緑や植栽で覆われた丘を連続させ、公園道路とし、津波を防ぎつつ様々な施設を整備する。



13.

幾世橋～北棚塩の高台の南斜面に、早期帰還を望む高齢者等のために、多様な居住様式の復興公営住宅等を建設する



幾世橋～北棚塩の高台の南斜面上に、復興公営住宅等の建設を開始する。このエリアは放射線量が低く、高台に面しているため津波の心配もなく、海への眺望も開けた場所であり、早期の居住場所にふさわしい。

幾世橋小学校はそのまま一時帰宅センターとしての機能を継続する。介護サービスの充実した集合住宅や戸建て住宅など、多様な様式のものを建設する。またこれらの住宅は、完全な帰還者のためだけでなく、短中期の暫定居住にも対応できるものとする。

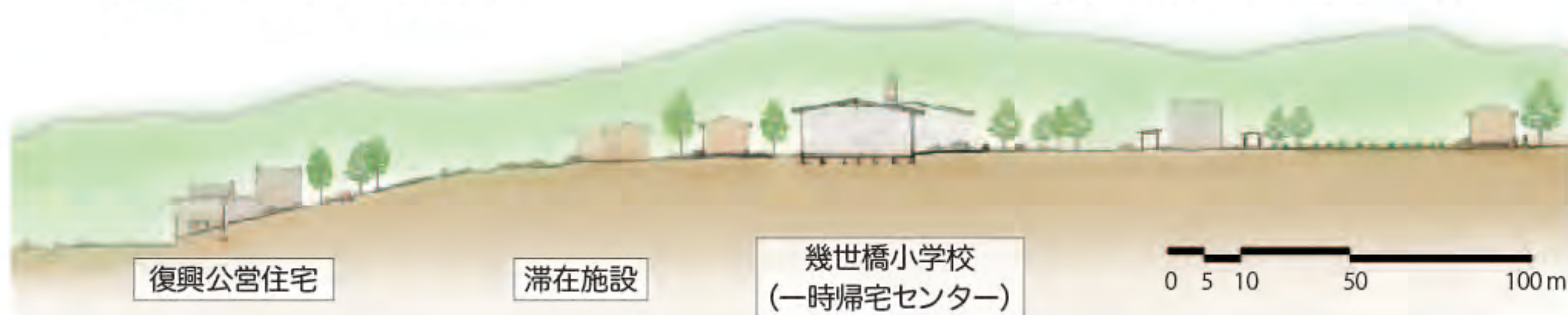
またこの時期になると、除染等のための前線基地として機能していた浪江町役場は行政機能を復活させ、浪江町再建に向けて本格的に動き始める。



南斜面に様々な住宅を建設する



高齢者たちが集まって食事をする



■【参考例】NPO JIN が目指している活動



■農と福祉の連携

帰還した高齢者たちが、放射性物質の検出されない土地で自然農法による農業を行い、できた生産物を都市部の人々に販売する。その収益で福祉事業を運営し、高齢者の暮らしを支える。

各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

14.

農地と農業の継続の為に、農業法人を設立して、まとまった土地で農作物を生産しながら、エネルギー自律都市を目指す

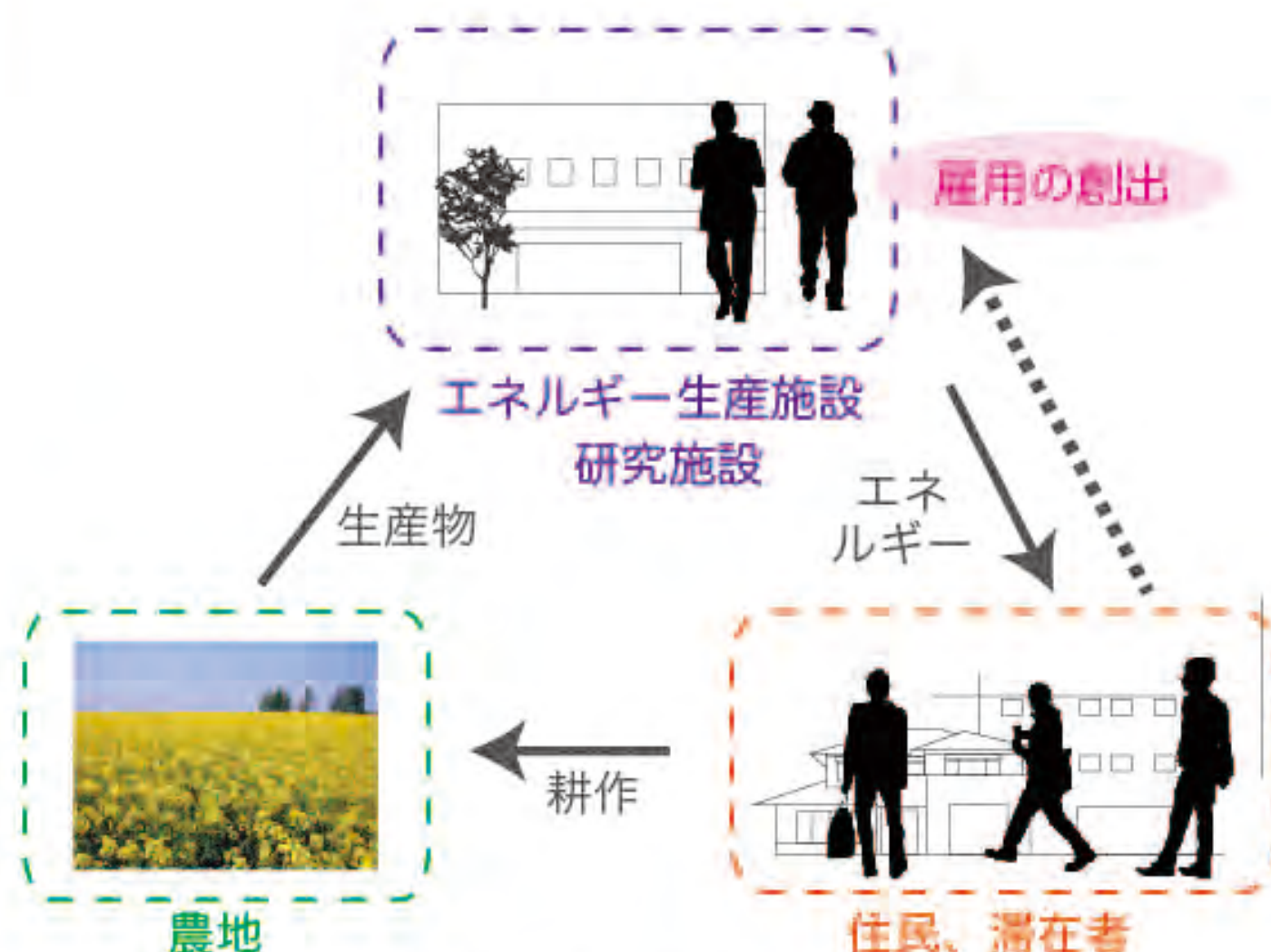


定住や各産業の復興が進むに連れて、エネルギーの供給方法が復興の課題になる。原発被災地である浪江町は、再生可能エネルギーで「エネルギー自律都市」を目指したいという願いが強い。

農地の所有者が法人を設立して維持・管理しながら、個人・企業・研究所と連携することで、園芸や食用だけではなく農地の有効活用が期待される。風力発電、太陽光、あるいは潮流、海面の水位差による発電、農作物を利用したバイオマス発電など、様々な再生可能エネルギーの生産施設を設け、並行して研究開発を進め、雇用も生み出す。浪江に帰還してからの新しい仕事として、多くの町民がこれらの関連産業に携わることになる。



農地に隣接した新エネルギー研究・生産施設

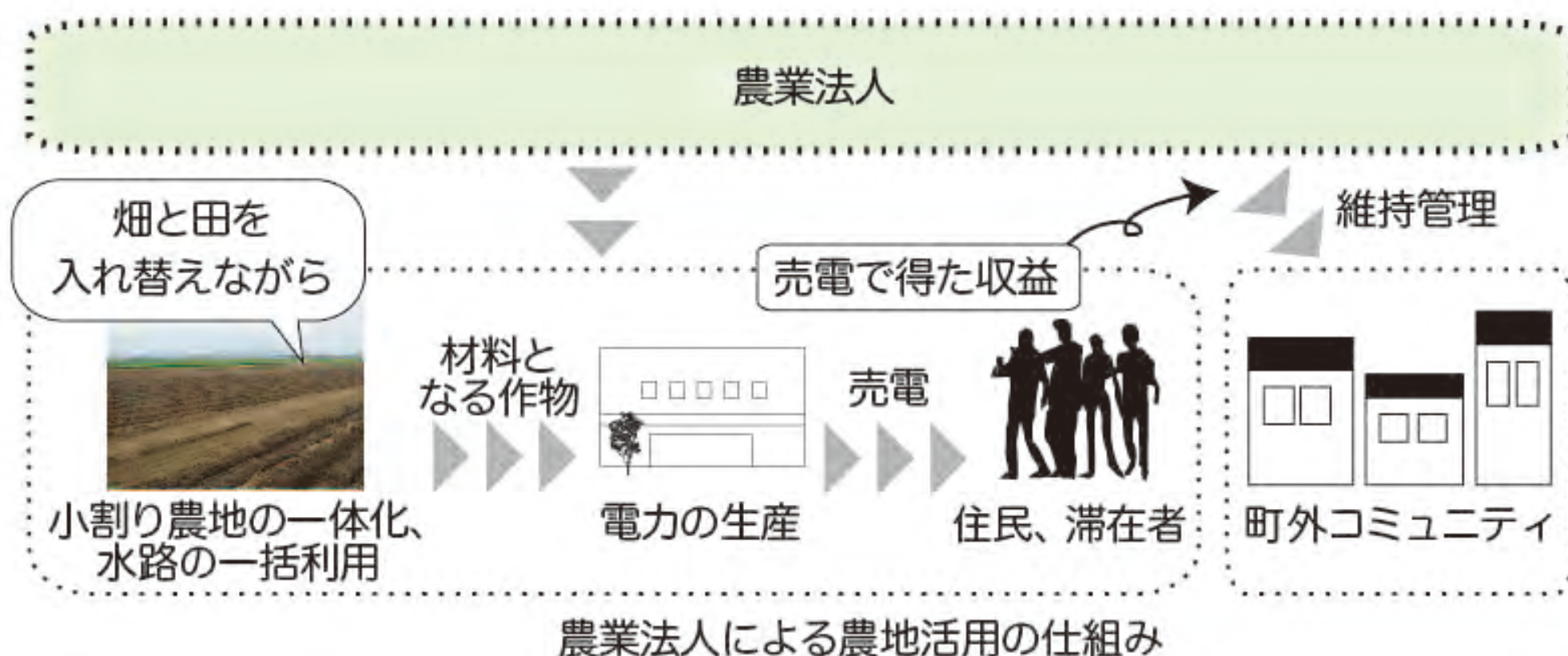


研究・生産施設と農の連携によるエネルギー自律都市

■参考となる事例

参考例①：潮の干満を利用した発電。潮汐発電ともいう。原理的には低落差の水力発電である。干満の落差の大きい場所に堤防を作り、満潮時に水門を開いて貯水池に海水をため、干潮時に放流しつつ発電を行う。
http://www.chuden.co.jp/kids/kids_denki/tsukuru/tsu_wave/index.htm

参考例②：梶原町では、風力発電によるCO2削減に貢献するだけでなく、売電収益を環境基金とし、住宅用太陽光発電の設置や間伐による健全な森林づくりへの活用等、風力発電を中心とした環境保全の取組（「風をおこし、町をおこす」）が進められている。さらに、千枚田オーナー制度などコミュニティに根ざした環境保全の取組も行われている。



農業法人による農地活用の仕組み

15.

国道6号線の全面復旧、中通りと沿岸部を結ぶ114号線の整備、常磐自動車道の開通など、周辺地域との接続強化を図る



道路網を整備し、二本松等の周辺都市や東京等の県外大都市との接続強化は復興を進めていく上で欠かせない。この道路整備を早急に進めなければならない理由は、第1に、周辺都市と連携、第2に、円滑な除染と復興を進めるため、第3に、全国に散らばった町民が浪江とのつながりを保つためのアクセスの改善のため、第4に、原発の異常や災害といった有事の際の避難路の確保である。

これには、南北の道路軸である国道6号線と、東西の道路軸である114号線の拡充をすすめ、道路の骨格を整備する。



国道6号線の現状



国道114号線の現状 ※ 2012/6/8 撮影

どちらの国道も、地震による被害はほぼ受けていない。また、114号線は被災当時拡幅工事が行われていたが、そのまま現在に至るまで放置されている。



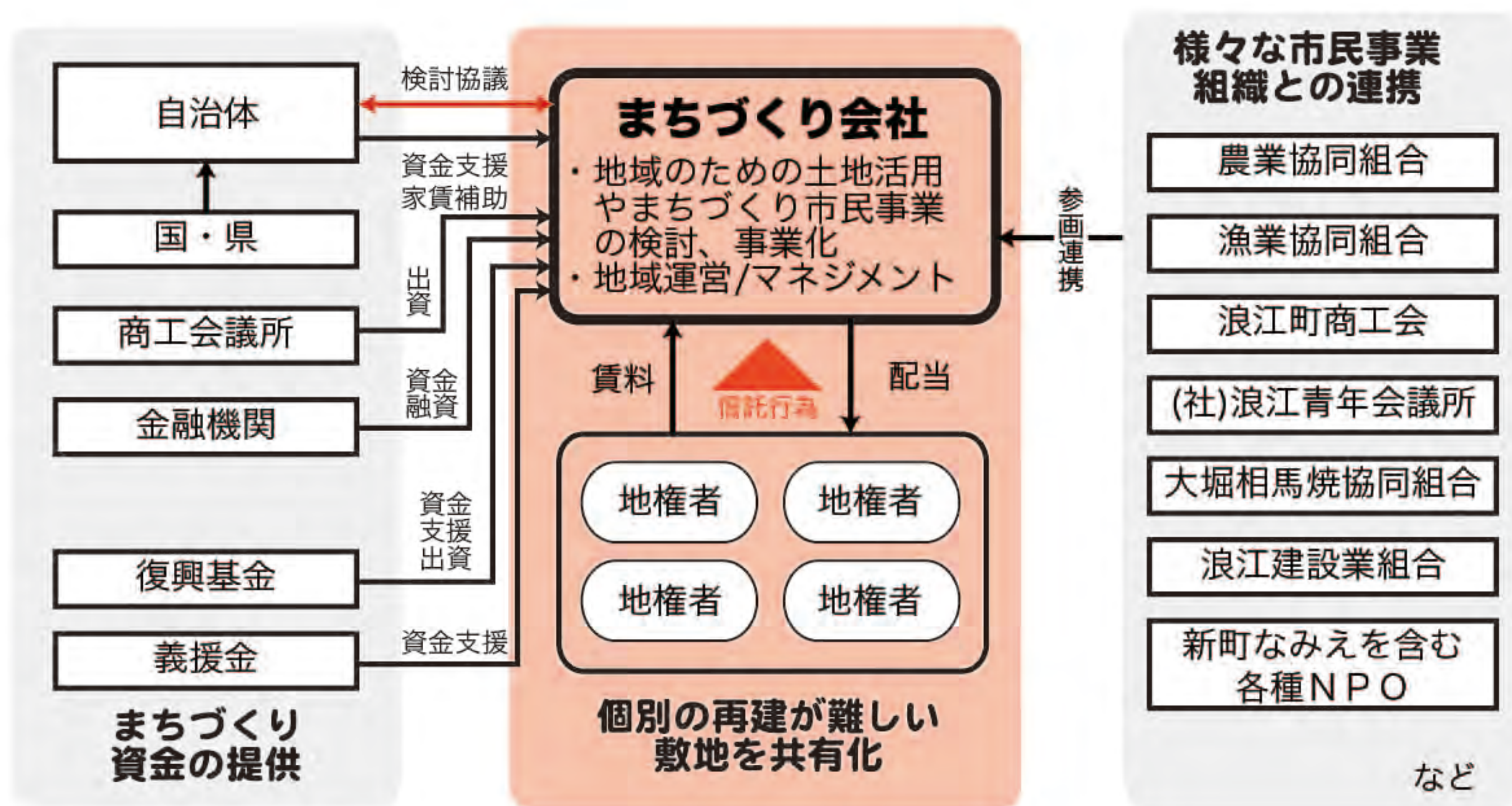
浪江町周辺の主要な道路

16.

帰還を目指す町民・企業・農業者・町などが協力して、
土地権利を一括して引き受けるまちづくり法人を立ち上げる



商店街などの中心市街地で、本格的な除染や再建を円滑に進めていくには、それぞれの地権者との合意形成が重要となる。現在のように土地がそれぞれの地権者に帰属し、権利関係が複雑に入り組んだ状態では、各種の事業を進めるのにまちと各々の地権者間で話し合いを設けなければならず膨大な時間と手間がかかってしまう。そのため、これらの土地を信託してまとめる「まちづくり法人」を立ち上げ、特に中心商業地において、その土地の活用を復興計画の遂行を目的として任せてもらうことで、除染からその後の土地利用までの段階を計画の進行とともに円滑に進めることができる。こうしたまちづくり法人を中心にして、復興計画を、専門家を含め地権者同士が十分に協議し、事前に共有し、作成しておく必要がある。



まちづくり法人を中心とした復興の体制

第三段階 定住に向けて環境整備を進める時期（定住環境整備期） （2018年－2030年）

「滞在」ではなく「住む」こと、それが実現できてこそ、本格的なふるさと浪江の復興の幕開けである。この時期には将来の本格的な町民の帰還に備え、復興公営住宅の建設をはじめとした定住環境の整備を計画的・戦略的に進める。

また、復興の要である農業復興、再生可能エネルギー施設整備などによる就業の場の創出など、定住と帰還に向けた環境整備を本格的に進める。沿岸部では自然を楽しむレクリエーションのための施設を充実させ、町民との絆を保ち続ける。



17.

P.28

今も残る請戸川南側の防潮堤と河川堤防に町民参加で植樹を行い、自然公園・海と連続性を保った「森の堤防」に再生する



18.

P.29

幾世橋～北棚塩の台地・南斜面に建設した復興住宅地を台地上及び小高地区に拡張させる



19.

P.30

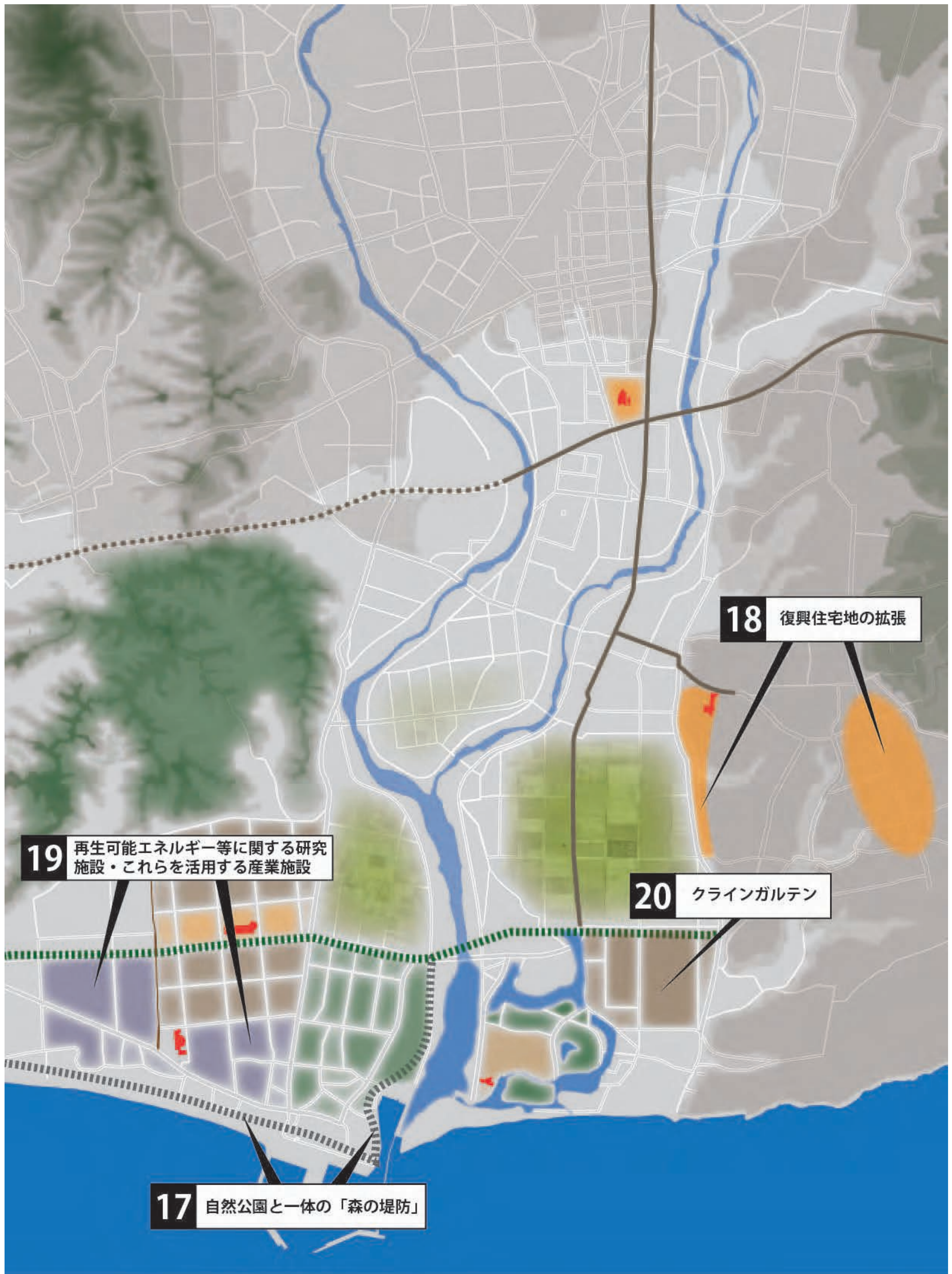
豊かな環境を基盤に、再生可能エネルギー等の研究施設、産業施設を本格的に沿岸部に立地させ、新しい産業での雇用を創出する



20.

P.31

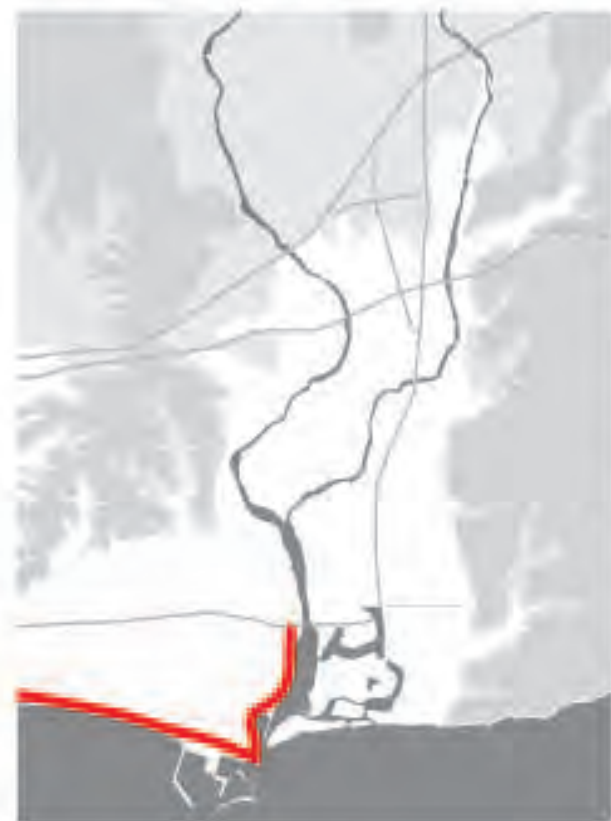
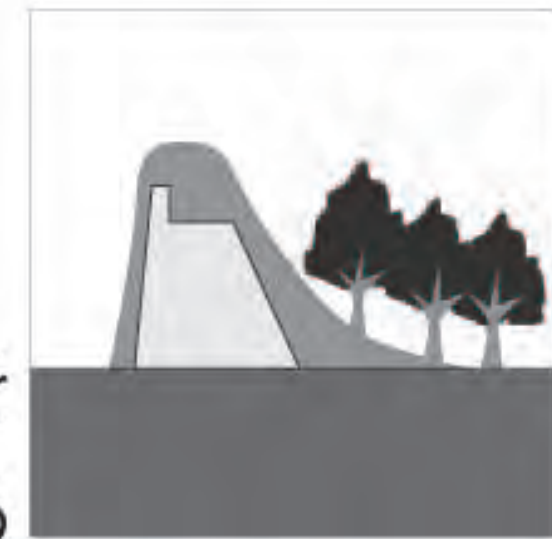
沿岸部に、自然農法や海・干潟での生活を楽しむ簡易作業のための出小屋、滞在施設を持つクラインガルテンを整備する



0 0.5km 1km 2km 5km

17.

今も残る請戸川南側の防潮堤と河川堤防に町民参加で植樹を行い、自然公園・海と連続性を保った「森の堤防」に再生する



帰還者の増加を見据え、さらなる防災面の考慮が必要となる。請戸川より南に向かって建設されていたコンクリート造の防潮堤は形を残しており、また川沿いに延びる河川堤防も被害は受けているものの、一部形を留めている。これら既存の防潮堤および河川堤防を再整備することによって、盛り土した浜街道との二重の防潮堤として機能させる。安全性が高まることで、沿岸部に研究施設などの立地も可能になる。尚、防潮堤は従来のコンクリート造の形に戻すだけでなく、254号線と同様に、瓦礫や植栽で覆うことによって自然地形に沿って各種の樹木や植物で覆われた「森の堤防」として整備する。

※ 2012/6/8 撮影



防潮堤・河川堤防



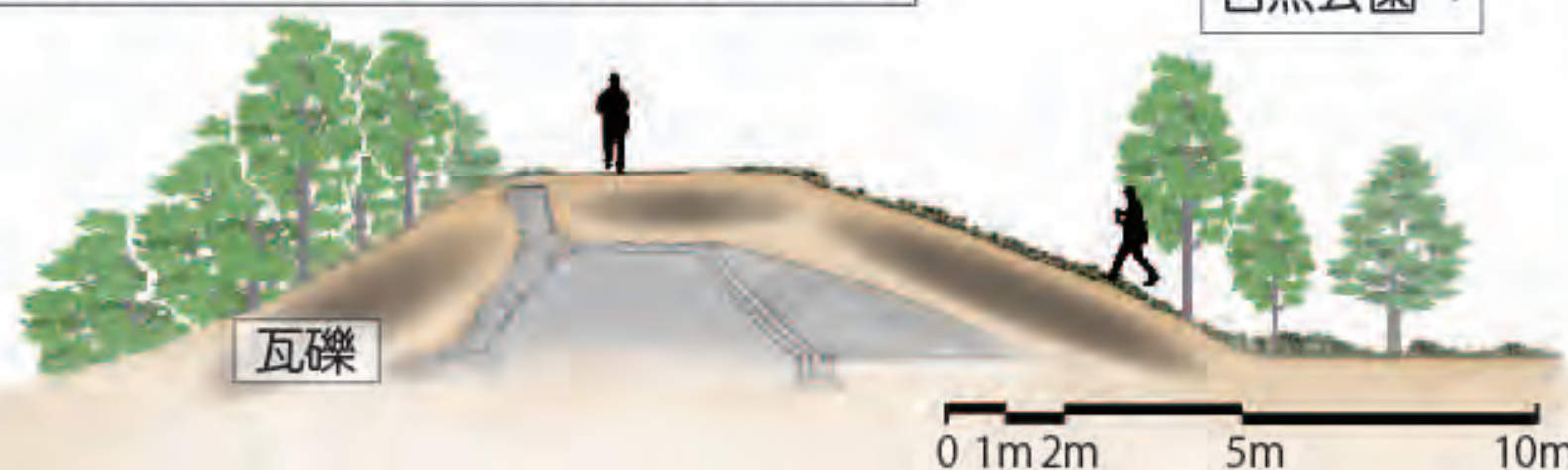
現在の防潮堤の様子

沿岸沿いに延びる防潮堤は現存し、形を留めていた。整備すれば防潮堤として再度機能すると思われる。しかし沿岸を自然公園としていく上で、コンクリート造の人工的なその姿は、景観を損ねかねない。

海

植林や瓦礫によって覆うことで、防潮林としてつくる。ゆるやかな丘のようにし、海と自然公園と連続性を持たせる。

自然公園→



海・自然公園と連続した森の堤防

※「いのちを守る森の防潮堤」が宮脇昭氏によって提案され、岩手県大槌町などですでに動き出している。

各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

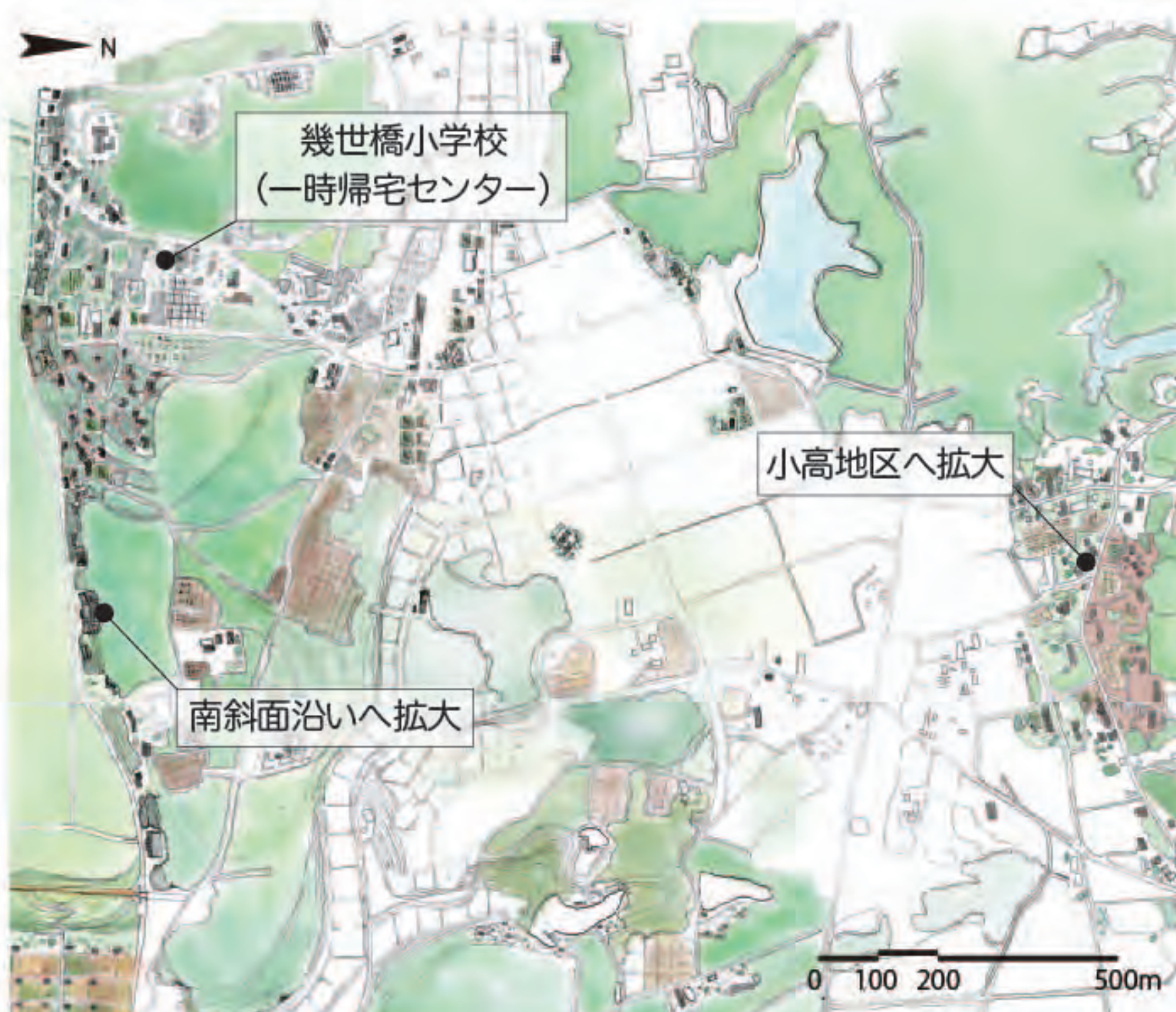
18.

幾世橋～北棚塩の台地・南斜面に建設した復興住宅地を台地上及び小高地区に拡張させる



早期の居住場所として、放射線量が低く、高台に面しているため津波の心配も少ない場所である幾世橋～北棚塩の高台の南斜面上から復興公営住宅等の建設を進めてきた。介護サービスの充実した集合住宅や戸建て住宅など、多様な様式で建設した復興公営住宅は、浪江町在住者を中心に安心して暮らせる生活の場となっている。

しかし被災地全体で考えた場合、復興公営住宅が必要なのは浪江町民だけではない。浪江町への帰還者だけでなく、さらには双葉町や大熊町の避難住民も一緒に暮らせるように、各地域の文化も考慮しながら小高地区まで拡大した復興住宅地を計画し、建設を進める。



沿岸部高台に滞在施設をつくる

沿岸部の森が茂るエリアでは、小規模なコテージやロッジ、小規模のホテルのような滞在施設を点在させることを計画する。海や干潟沿いでの滞在だけでなく、森の中で静かに過ごせるような滞在の仕方もここで実現できる。

19.

豊かな環境を基盤に、再生可能エネルギー等の研究施設、産業施設を本格的に沿岸部に立地させ、新しい産業での雇用を創出する



浪江町の再生が軌道に乗り、徐々に復興の姿が見え始めれば、原発災害から回復した美しい自然と豊かな風土、安全な生活環境は研究施設や新産業施設の立地にとって大きな魅力となる。沿岸部を中心に研究施設、新産業施設を立地させ、多様な世代の住民を受け入れ、新たに雇用を生み出していく。



豊かな環境とともにある沿岸部の新しい産業



各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

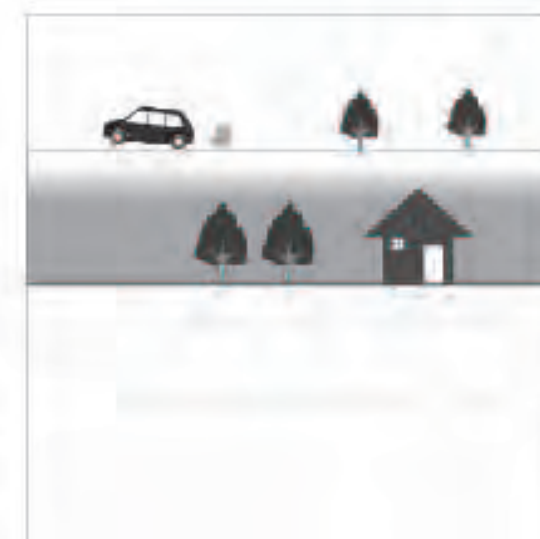
II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

20.

沿岸部に、自然農法や海・干潟での生活を楽しむ簡易作業のための出小屋、滞在施設を持つクラインガルテンを整備する



これまで幾世橋小学校などの前線基地を利用して、自宅の整理や農地の管理は行われてきたが、そこでの一時的な滞在では時間に追われ、豊かな自然に囲まれた浪江らしい暮らしは感じられなかった。自然と共生を目指した自然公園周辺に、本来の豊かな浪江と復興の様子を町外の利用者が体験・学習できる場所を整備していく。

自然公園内に小舎を建て、そこを拠点に自宅や農地の手入れを行い、嵩上げされた浜街道沿いにクラインガルテンをつくる。一軒にそれぞれ農地が割り振られ、自然農法や干潟での魚釣りなど、豊かな自然の中でゆったりとした生活を楽しむ様々な活動がなされる。



滞在施設を持つクラインガルテン



簡易滞在施設となる出小屋

※クラインガルテン

ドイツが発祥の、200年の歴史を持つ農地の賃借制度で、市民農園の一種である。一区画につき一つの小屋が併設されており、各々が借りた農地で好きなものを栽培しながら、余暇を楽しむことができる。

第四段階 条件の整った浪江町に本格的な帰還を進める時期 (2025年－2050年)

これまでの持続的な取り組みが実って、浪江町への帰還が本格的に進むのがこの時期である。地域全体に、かつての賑わいが徐々に戻りつつあるこの時期、希望溢れる未来に向かい、それぞれの地区での復興まちづくりを推進する。浪江町を大震災と原発災害を克服した世界に誇れるまちに復興させるのである。帰還が本格化すれば、商業やサービス業も再開することができ、もとの中心商業地の新町商店街や駅前地区の再生を目指したプロジェクトもまちづくり法人などを中核にして進めることができるようになる。



21.

P.34

賑わいの拠点、生活サービスの中心となる中心街の再生プロジェクトを、まちづくり法人をプラットフォームにして計画的に進める



22.

P.35

常磐自動車道の東側地域を中心に、それぞれの地区の特性に合わせた復興計画を作成、実行し、町全体のバランスの取れた再生を実現する



23.

P.36

新しい環境エネルギー産業や、地域の自然・文化を活かしたエコ・ツーリズムなど、各種の新規産業を誘致・振興する



24.

P.37

浪江町などの東日本大震災被災地を主催地に、オリンピックを開催する

地域全体で行うもの

22 地区の特性に合わせた復興計画を地区ごとに作成

23 新しい産業の誘致・振興

24 オリンピックの開催

21 賑わいの拠点、生活サービスの中心となる中心街



0 0.5km 1km 2km

5km

21.

賑わいの拠点、生活サービスの中心となる中心街の再生プロジェクトを、まちづくり法人をプラットフォームにして計画的に進める



多くの浪江町民が、再びまちの中心部に賑わいが戻ることを強く願っている。そして、新しい魅力にあふれる、誇れるまちとなることも、多くの人々が願っている。そこで、線量が下がり除染が完了した時点で、浪江町の賑わいの拠点となる中心街の再生まちづくりをすすめる。

市民有志・企業による多様な形態が考えられる「まちづくり法人」が中心街のまちづくりを先導し、様々なまちづくりプロジェクトを組み立てる。例えば、複雑に絡んだ土地の権利関係を一括して管理運営する仕組みをつくり、合理的な利用と運営を実現するなど、被災前からのまちづくりの課題の解決する。このように、浪江らしさや歴史を残しながらも、世界に誇れる新しい魅力に満ちたまちを、地域が主体となって創りあげる。

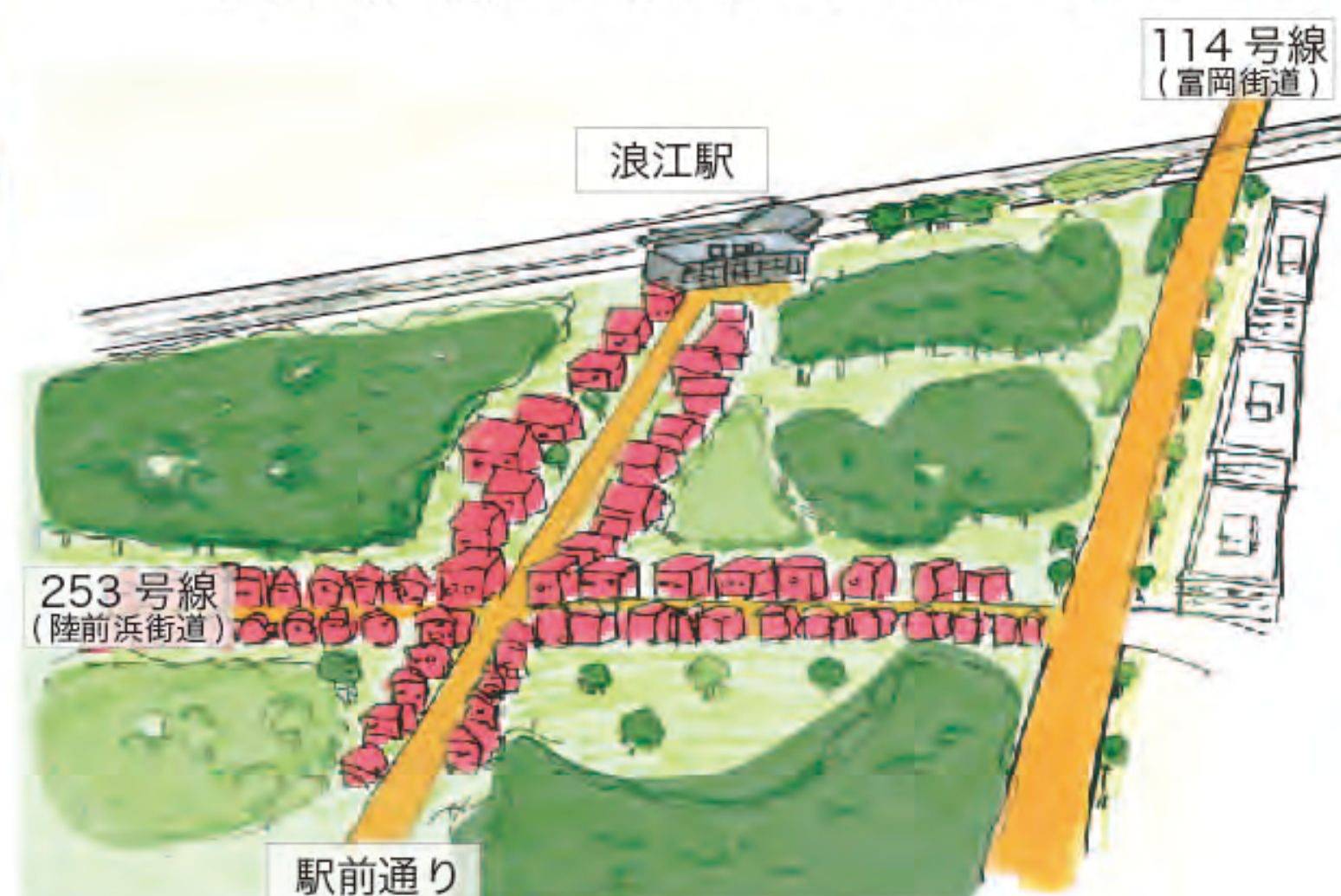
■浪江駅前中心部の将来像例



中庭空間のある住宅・商店群を繋ぎながらまちをつくる



福祉施設・病院と一体となったまちをつくる



大事な建物だけを残し、森の中のまちをつくる

各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

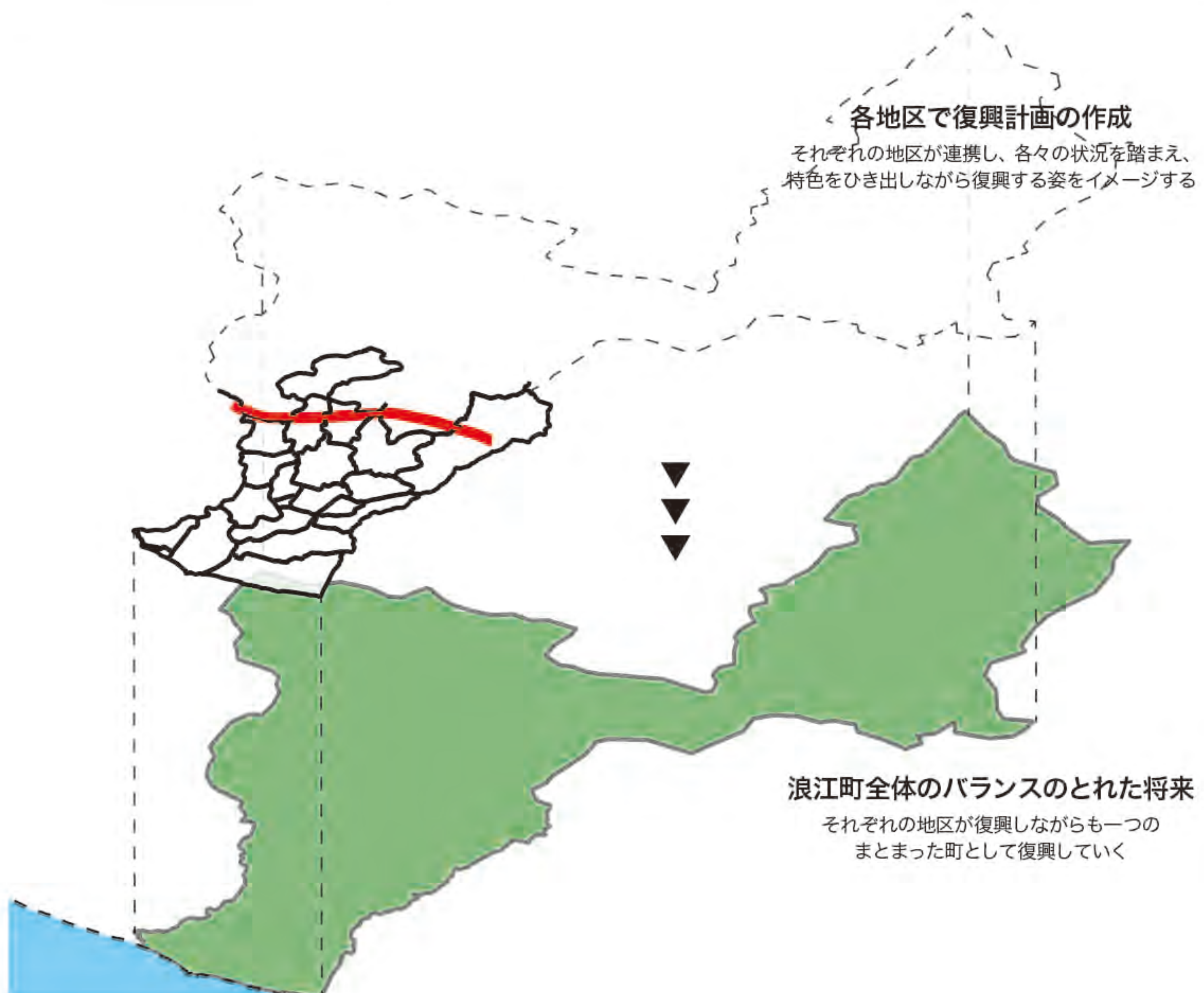
22.

常磐自動車道の東側地域を中心に、それぞれの地区の特性に合わせた復興計画を作成、実行し、町全体のバランスの取れた再生を実現する



拠点的な場所だけでなく浪江町全体の復興に取り組むため、この時期に空間線量や除染の実態等を考慮しながら、具体的な市街地復興・整備計画を地区ごとに作成し実行に移す。このとき特に、常磐自動車道の東側の地域は、それぞれ地区特性に応じた復興が可能となるよう、この時期までに除染や基盤整備を進めておくことを目標とする。

また、隣接する相馬焼きのふるさと・大堀地区は、長い時間がかかっても必ず復興・帰還を実現しなければならない価値のある地域である。このように、長い時間がかかっても復興と帰還を実現するために、さまざまなすばらしい資源を持つ浪江町の各地区、各集落の復興へ向けての具体的なビジョンを描き、実行に移す。



23.

新しい環境エネルギー産業や、地域の自然・文化を活かしたエコ・ツーリズムなど、各種の新規産業を誘致・振興する



震災前、浪江町には大規模な製薬会社や精密機械工場が営業しており、住民の7割以上が町内で勤め、その他は相馬を中心に通勤していた。当時の状況を完全に復元することは叶わないかもしれないが、浪江は着実に世界に冠たる復興を遂げつつある。

新しい浪江には、大規模な企業だけでなく、豊かな自然環境や文化を活かした企業が集まり、再生可能エネルギー活用による研究所や産業をベースとした「自律エネルギー都市」となる。さらに、農業（漁業）法人の努力と技術革新により、有機農法・漁業の地産地消による豊かなくらしが魅力と呼び、技術力・活力ある高齢者が医療や福祉・余暇を求めて集まる町となる。

■旧来の産業の再生と復活



農業、漁業を再生させる



元々あった工場を復活させたり、新しく誘致する

■新しい産業の創造

旧来の産業だけでなく、新しい浪江のアイデンティティとなる産業を発掘していくことで、これまでとは異なる新しい浪江の発展の道を歩む。



福祉医療産業



浪江の豊かな環境を利用した観光事業や地域振興



各プロジェクトの詳細

I 復旧始動期

II 復興基盤形成期

III 定住環境整備期

IV 本格的な帰還を進める時期

24.

浪江町などの東日本大震災被災地を主催地に、オリンピックを開催する



数十年の月日を経て見事に復興を遂げた東日本大震災の被災地は、世界の希望の象徴となって、世界中から来訪者が絶えない日々である。魅力的な自然地形や先進的な事業の取り組みは、世界的にも高い関心を集めている。

そこで、遂に国際競技大会を岩手・宮城・福島の3県合同で開催することが決定した。世界中から様々な競技の選手が来日し、カヌーや馬術といった自然特性や地域の文化にもゆかりのある競技も開催される。優れた設計のパビリオンやスポーツホールなどの関連施設も建設され、より世界に誇れる地域となっていく。

この世界競技大会を通じて、いよいよ浪江町も世界に誇れる復興を成し遂げた町となる。





なみえ復興双六

※この図は、本冊子に記載した24のプロジェクトを双六として一枚に表現したものです。数字はプロジェクトの番号と対応しており、四つの段階の関係性がわかるようになっています。

Start!

GOAL!!

24

福島・宮城・岩手の三県
合同でオリンピックを開
催し、その名を世界に轟
かせましょう！

01 町外コミュニティの整備が始まりました。

～まちのこえ～
酪農や漁業・農業の技術を繋ぐため、日々頑張っ
て活動しています！

09 まわりの町外コミュ
ニティとつながりを
強めて行きましょう。

移動ネット
ワーク・福
祉の充実！

よりよい町外コミュ
ニティに！

～まちのこえ～
大熊・双葉の人を含め、若い人
も浪江での生活を始めて、だん
だん町が賑やかになってきたよ。
仕事も増えてきたみたい！

03 幾世橋小学校に一時
帰宅センターが出来
ました。

～まちのこえ～
浪江町への行き来が
楽になったよ！

15 道路の接続強化！

浪江に住ま
いを増やし
ましょう！

13 早く帰りたい人た
ちのための復興公営住
宅が出来ました。

18 南斜面沿い・小高方
面にも復興公営住宅
が出来ました。

21 中心市街地や元の集
落にも新しい町がで
き始めました。

06 農地の維持管理・除
染が始まりました。

～まちのこえ～
僕は週一回一時帰宅
センターに集まって畑
の管理を始めたよ！

14 農作物を使って発電
を始めました。

～まちのこえ～
友達と畑仕事をしなが
ら過ごす浪江での毎日
は本当に楽しい！

農を中心に
町の復興を進
めましょう！

～まちのこえ～
ついに町ができた！仕事
もある！僕らも子供を連
れて、浪江に帰ろう！

浪江の野菜がブランド
化されました！

02 浪江町役場を除染・
復興活動の基地にし
ましょう！

売電して
町外コミュニティ
の運営費に！

16 農地や土地を一括で
管理する組織を立ち
上げました。

～まちのこえ～
農業法人が出来たお
かげで、農地の利用
が楽になったよ！

19 新エネルギー産業の研
究施設・工場が建設さ
れました。

産業を復活させ
新しい雇用を生み
出しましょう！

23 これまであった産業
や、全く新しい産業
を誘致しましょう！

05 除染の実装実験開始！

07 大平山に鎮魂の森が
できました。

～まちのこえ～
お墓参りができる
ようになって本当
に嬉しいわ！

10 港の整備を開始！

～まちのこえ～
請戸港の再生なく
して浪江町の復興
はありません！

17 壊れた防潮堤・河川
堤を補修して「森の
堤防」が出来ました。

08 埋蔵文化財を発掘し
ましょう！

12 自然豊かなかさ上げ
道路が出来ました。

二つの堤防で
安全確保！

20 クラインガルテンを
作りましょう！

04 マリンパークなみえ
を沿岸部のシンボル
にしましょう！

沿岸部を自然豊
かで、より魅力
的な空間に！

11 干潟のある自然公園
を作りましょう！

～まちのこえ～
自然豊かな素晴らしい公園が
できて、町民でなくとも週末に訪
れる人が多くなったよ。私も毎
週干潟で釣りをしているよ！

第一段階

第二段階

第三段階

第四段階

これまでの取り組み

2011年3月11日に発生した東日本大震災から約1年。「まちづくりNPO新町なみえ」主催のもと、浪江町民の皆様の生活やコミュニティの再建に向けた取り組みが動き出しました。

2012年3月3日・4月14日に二本松市浪江仮役場で幹事会が行なわれ、これを踏まえて、5月12日に二本松、6月9日に南相馬、6月23日に東雲でワークショップが開催されました。6月16日には成果報告会も行なわれました。

ワークショップ・幹事会概要



<第1回幹事会>

日時：2012年3月3日

会場：二本松市内 浪江仮役場第二事務所

被災から約1年間、浪江町の復興に対する様々な思いを交換する場も少なく、各々が胸に抱えながら避難生活を送られてきました。

第1回幹事会は、こうした思いを自由に交換する会となりました。また、今後の幹事会・ワークショップの進め方についても話し合われました。



<第2回幹事会>

日時：2012年4月14日

会場：二本松市内 浪江仮役場第二事務所

いつか浪江町に帰還するために、やらなければならないこととは何なのか。第二回幹事会では、順調に帰還が進む場合、ゆっくりと帰還が進む場合という二つの前提にわかれて具体的な解決策が議論されました。

実際に浪江町の模型を囲みながら、意見を書いた旗を差す「旗指ゲーム」を行ないました。



<二本松ワークショップ>

日時：2012年5月12日

会場：二本松市内 福祉センター

総勢約70名、二本松に避難する浪江町の方を中心として、多くの方が福祉センターに集まり、これまで幹事会で話し合われた内容の共有が行われました。

さらに、幹事会と同様「旗指ゲーム」を行いながら、新たな意見を頂くことが出来ました。また、「町外コミュニティ」についても意見交換が行なわれました。



＜南相馬ワークショップ＞

日時：2012年6月9日

会場：南相馬市内 福建コンサルタント

相馬・南相馬地区でも多くの浪江町民の方が避難生活が続いています。

他の地区で生活を送る方にも意見を頂くために、引き続き同じ手法を用いて南相馬でもワークショップを行いました。会場として、南相馬市内で会社の再建を行った福建コンサルタントの事務所をお借りしました。



＜成果報告会＞

日時：2012年6月16日

会場：二本松市内 岳温泉東三番館

約3ヶ月半という短い期間の中で、幹事会・ワークショップ、またヒアリング調査を通して得ることが出来た皆様の意見から、早稲田大学都市・地域研究所+佐藤滋研究室の責任の下、復興ビジョンを作成し、報告会を行いました。この復興ビジョンに対して、参加された町民の方から修正点を指摘していただきました。



＜東雲ワークショップ＞

日時：2012年6月23日

会場：東京都内 東雲住宅

浪江町からの距離が遠ければ遠いほど、浪江町と関わりを持つ機会は少なくなっていくと考えられます。

東京に避難されている方の多くは、町外での生活を基本としており、こうした方々が、ふるさとと決別するのではなく、どのように関わっていくことが出来るのか、模型を囲みながら意見交換を行いました。

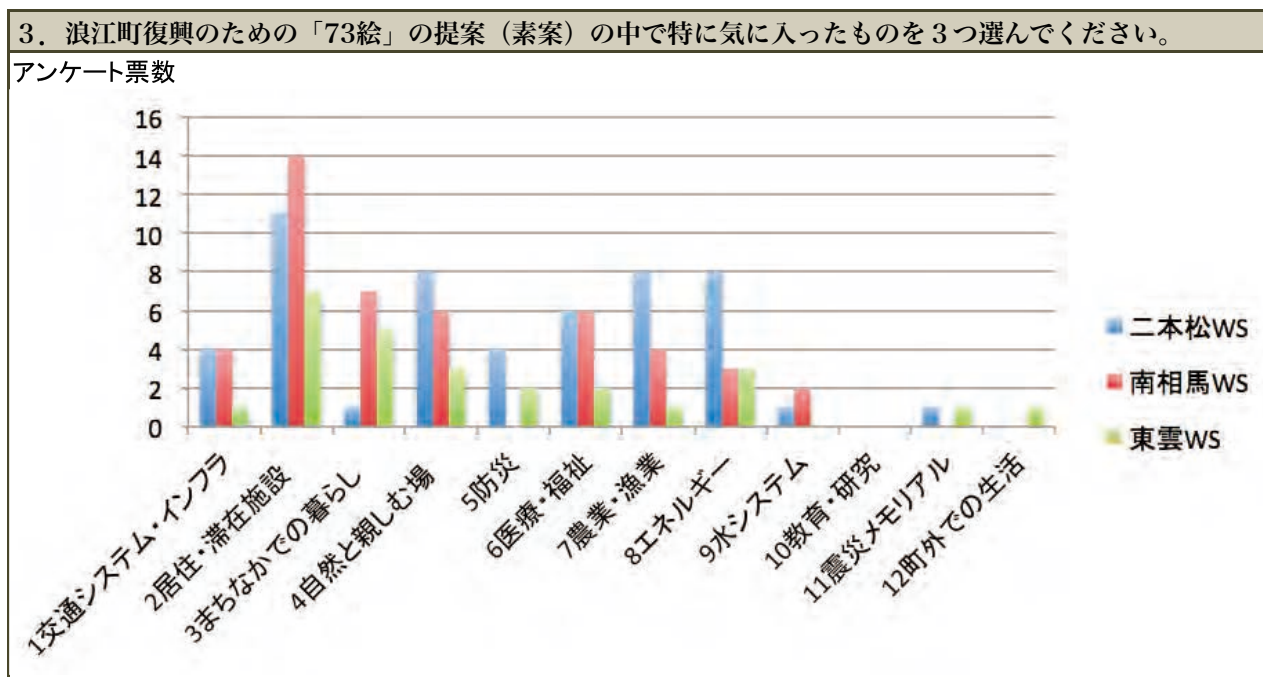
ワークショップアンケート結果 (5/12二本松、6/9南相馬、6/23東雲)

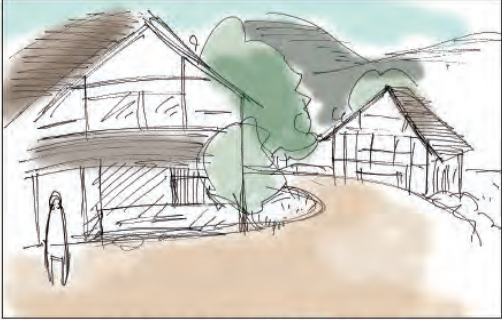
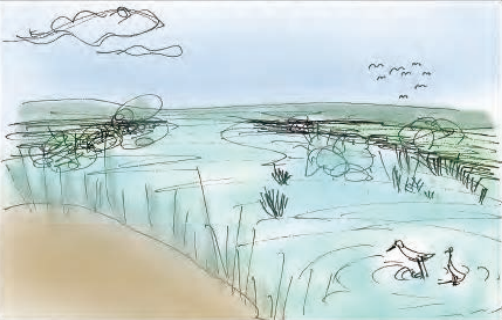
※アンケート総数は、二本松24件、南相馬18件、東雲13件

0. 回答者のみなさん		二本松WS (回答数21)	南相馬WS (回答数14)	東雲WS (回答数13)
性別	男性	83%	39%	62%
	女性	17%	56%	38%
世代	30代	18%	0%	33%
	40代	5%	27%	0%
	50代	36%	27%	8%
	60代	23%	47%	33%
	70代	18%	0%	25%
現住所	二本松市内	33%	86%	92%
	福島市内	29%	14%	8%
	その他	38%	0%	0%

1. 今後の復興まちづくりについて、参加者の皆さんと有意義な意見交換ができましたか？	二本松WS (回答数24)	南相馬WS (回答数17)	東雲WS (回答数12)
とても有意義だと思う	71%	76%	67%
まあまあできた	29%	24%	25%
あまりできなかった	0%	0%	8%

2. このようなワークショップを通じて、浪江町の復興について話し合うことが大切だと思いますか？	二本松WS (回答数24)	南相馬WS (回答数17)	東雲WS (回答数12)
とても大切だと思う	75%	65%	42%
大切だと思う	25%	29%	58%
あまり大切だと思わない	0%	6%	0%



WS会場別にみた浪江町復興のための「73絵」の提案（素案） の選択された提案のタイトルと選択数	二 本	南 相	東 雲	2-2 復興公営住宅をつくる
1 交通システム・インフラ	4	1		 請戸地区の住民や、双葉町など双葉郡の他市町村で住居を失った住民も受け入れられる、復興公営住宅を造る。
1-4 町内を路線バスで移動する			1	
1-5 弾丸道路で西方から浪江に入る		3		
2 居住・滞在施設	6	1		
2-2 復興公営住宅をつくる		4	1	
2-3 ソーラーパネル住宅で暮らす		4		
2-4 作業員の宿舎を整備する	1			
2-5 元の集落の人々を中心とした住区で暮らす		4	1	
2-6 既存施設を復興住宅に用途転用する	1		1	
2-7 福祉施設が併設された住宅で暮らす		1	1	
2-8 コレクティブハウスで生活する	2		1	
2-9 短期・長期滞在住宅で一時的な滞在をする			1	
2-10 既存施設を住宅や滞在施設に用途転用する	1		1	
3 まちなかでの暮らし		1	1	4-1 沿岸部に湿地帯、干潟を整備する
3-1 季節行事			1	 沿岸部の地盤沈下したエリアを中心に湿地帯を整備することで、かつて存在した福浦のように、渡り鳥や貝類など特有の生態系が形成される。
3-2 路上パフォーマンスなどイベントを企画する		1		
3-3 商店街で食べ歩きする			1	
3-4 足湯を楽しむ		1		
3-6 復興商店街で買い物・商店街運営をする			1	
3-7 集会場、公民館に集まる		1		
3-8 苕野神社などを再生させる	1		1	
3-9 寺院などの伝統建築を残す		3		
4 自然と親しむ場	2	2		
4-1 沿岸部に湿地帯、干潟を整備する	3	1	1	
4-2 桜街道を歩く	1	2		7-1 農地回復や景観向上のために花を植える  農地の回復のため、菜の花やひまわりなどを植える。またたくさんの花を植えることで町の景観が向上し、人々が町へ訪れるきっかけともなる。
4-7 魚釣りをする		1		
4-10 川沿いにビオトープなどの環境共生空間を設ける	2		1	
4-11 ヤナ場でサケ漁をする			1	
5 防災	1			
5-1 災害時に盛土した広場に避難する	1			
5-2 嵩上げ自動車道路をつくる	1			
5-4 自然工法の防潮堤をつくる	1		2	
6 医療・福祉	4	1	1	
6-1 町内の個人病院が集まった総合病院をつくる	1	1		
6-2 高齢者のための文化施設をつくる	1	1	1	
6-4 サービスや設備が集約された福祉拠点をつくる		3		
7 農業・漁業	6	2		
7-1 農地回復や景観向上のために花を植える	1	1	1	
7-2 自然エネルギー生産のための農作物を栽培する	1	1		
8 エネルギー	5		1	
8-1 風車を設置して発電する		3	2	
8-2 ソーラータワーで発電する	1			
8-6 バイオマスエネルギーを生産する	2			
9 水システム	1			
9-4 安全な水を遠方から送水する		2		
10 教育・研究			1	
11 震災メモリアル				
11-2 自然一体型の墓地をつくる	1		1	
12 町外での生活				
12-2 交流会を開く			1	

※個別の項目などについては、浪江町復興のための「73絵」の提案（素案）を参照してください。

4. 自由意見 ※アンケートに記入されたものをそのまま記入しております。

(二本松 WS 5/12実施)

- ・社会的弱者（高齢者、障害者、子供等）の気持ちに寄り添って、復旧、復興に向けてがんばりますよ。
- ・前線基地、町外コミュニティなどの用語の意味をきちっと整理して始めるべき。若干混乱。仮の町問題の前提整理では、NPO 名義でのもう1歩踏み込んだ資料をつくり、事前説明が必要。役場側+αで詳細に。
- ・本日出た意見等は、話し合いだけで終わらず、近い将来必ず実現するんだという信念を持ち、前に進まなければいけない。これをどういう風に変現するか真剣に考えていこうと思う。
- ・大変ご苦労さまでした。私はなんとかこれをネットワーク化し、被災地の人々の考えをまとめていきたいと思います。今後ともご協力よろしくお願いいたします。
- ・安定しない原発が、変に思考する上でのネックになり、浪江に帰りたい気持ちと、再度放射能が降る不安の為に帰れないのではないのかという気持ちが揺れ動き、自分の考えそのものがわからない状態で、このWSに参加しました。
- ・前向きになれて楽しかったです。
- ・復旧、復興の為にビジョンが発表されているが、今後の計画を行う為には、今回のWS等で具体化した計画を立てて、実行に向かうことが大切である。東電の終息...収束に向けた行動と復旧、復興を同時進行させる為にも、早期に計画を実行に移す日のくることを願っています。
- ・WS 設営とジオグラ活用のおもしろさを体験したことはありがたい経験でした。ただ、学生の司会運営方法の勉強が必要でしょう。
- ・インフラ整備の話の中で、地下鉄をつくり、福島市、郡山市、いわき市、仙台市をつなぎ、再度原発での事故の際には核シェルターとして使えるのでは、というお話が出ていました。世界で一番すばらしい施設があることが、今後必要だと思います。できることなら、双葉郡から東京までの地下鉄ができれば安心できるかなあ...
- ・帰れないけど帰れない。
- ・除染が完了したことを前提としての議論は難しかった。しかしながら、こういった議論は町への展望を示したりするには必要なものであると感じた。
- ・若年層のみのワークショップ開催も必要と思います。理想と現実の問題には必ず直面します。一人ひとりの理想をかなえることは、ほぼ不可能で、仕方がないことと思います。しかし、示された現実が、政府や行政などのエゴにならないようにしていきたいと思っています。
- ・今現在精神的に余裕がない状態で、早く方向性を決めたい。ただし、20~30 年度のことを考えたときを熟慮しなければならない。ただ、考え方の基本では、放射線量

が、安心できる場所を考えており、その方向性では無い方に町の方向性があるのであれば、町民ではなくなってしまうおそれがある。もう一つ、方向性の決定が遅ければ、町もなくなってしまう心配がある。明るい夢を描きたい！

- ・現況を考えると机上の空論に思う。将来的に参考になった。
- ・先の見えない中、帰還を諦めかけている中で、このような機会を頂きましたこと、感謝したいと思います。個々に帰郷への思いを馳せても、浮かんでくるのは震災前の生活のことばかりで、何一つ新たな生活環境を想像することができませんでした。他の皆さんも、今後の浪江町に対してどの様にお考えなのか、不安に感じていましたが、ワークショップの中でそれぞれの思いを確認できたことが良かったです。今回は、原発と共生していかなければならない（本当の収束まで）ことには触れずにまちづくりを考えて話しましたが、次回はいよいよ現実に触れながら将来のビジョンを検討してみたいと思います。
- ・第一に安心して暮らすには、何をして、それからどうするか？頭の中にガンがあって、先に進めない。夢物語にならないければ良いと思いますが…。ただ今からやらねばいけないと思っていますので、頭を絞ってアイデアを出していきたいです。
- ・未来への夢・ビジョンを描く時期。いくつかのシミュレーションから具体化をめざす。国家プロジェクトで未来都市をつくるくらいの構想。スマートシティ。
- ・高齢者を中心とした施設、20代、30代の人々が帰ってくる町づくりを考えてみる。現状では地区を文化的な物は残して全てを更地にして区画整理する方が1軒1軒除染するより良いのではないかな。
- ・意見交換を通して自分の考えをまとめたり、修正をすることができた。得たものを他に伝えることで新しい発見ができたり、相手が希望を持って生活するように変えられることができているので、ありがたい。
- ・浪江町の再生に向けた考え方が少しずつ思いつくようになった。
- ・無人のまちには復旧も復興もない。帰りたい人、帰れる人が、帰れる環境づくりが第一。

（南相馬 WS 6/9実施）

- ・夢の夢の又夢の物語のようなまちづくりの構想ですが、いつかきっと元の美しい浪江町、すてきな浪江町に戻れる日が来ることを願っています。自分の命があるかぎり前向きに生きてゆければ良いと思います。静岡にいて本当に浪江が恋しく、辛く、悲しい日々を送ってきたので、もう二度とこの様なことがないように日本も（浪江町民も）原発に反対したいと思う。脱原発に向けて、運動してくれる人を希望しています。私もずっと関わっていきたいです。未来の子供達のために！
- ・意見を出せる場としてどんどん開催して、町に提案してください。

・暗い話ばかりで仮設から外出することはありません。今日は浪江のこれから 10 年、20 年の話で、自分がいつまで生きられるかわかりませんが、浪江に帰りたいです。浪江の話ができて、参加してよかったです。

- ・一步一步（一つ一つ）復興まちづくりができるように願っています。
- ・NPO のみなさんお疲れさまです。これからもよろしくお願いします。毎日、土いじりも、草むしりもできない状態で、とてもつらい毎日ですが、多くの人と出会う気持ちがとてもうれしいです。
- ・美しい浪江に早く戻して欲しい！！その為にもっと本日の様な希望のある話し合いの場が欲しい！！今日はありがとうございました！
- ・夢と希望は難しいと思いますが、少しずつスマイルを出せるようがんばっていきたい。また参加させてください。今日はありがとうございました！
- ・個人個人が色々な意見をお持ちだと感じました。浪江町は水も魚も自然もとてもすばらしい町でした。20 年後、30 年後に、今日のような話し合いのようなことが現実になるように心から祈りたい気持ちでいっぱいです。浪江の町がもとどおりになるまで長生きしたいです。
- ・国の対応が遅すぎる。本当に困っている人を見ていないように感じる。
- ・浪江町復興の基礎とした考え方が、一步でも進行できることができました。
- ・今回の話し合いは、現実的には無理な除染によって放射線が低下したという前提のものでした。自分にとっては非現実的過ぎて、この作業がどれくらい意味のあることなのかわかりませんでした。また、全ての会合で言えることですが、どこでも出席者の大多数は年寄りばかりで、これからを担う若者が少なく、その人たちの意見が取り入れられません。それをとても気にしています。
- ・先が明るく感じられ、希望が少しもてる様になりました。
- ・個人で色々な思いや意見があってなかなか難しいものを感じます。いい方向に進んでくれたらと思います。まだまだ時間はかかりますが、早い進展を願うばかりです。
- ・復興に関して色々な話を聞いて参考になりました。
- ・関係者の方々へのご苦勞、大変だったと思います。楽しく学習させてもらいました。浪江の将来の見通しがわからないので今後の生活に不安を感じます。

（東雲 WS 6/23実施）

- ・福島県外のみなさん、学生さんが真剣に福島（浪江）の事を考えてくれていることが大変うれしい。
- ・お疲れ様でした。
- ・継続して下さい。
- ・自分は浪江町の事について分からない事や、場所などが多すぎると感じさせられた。

それと、意見交換などああった場合は、やはり得意ではなく、自分がいるべき場所ではなかったか、とってしまった。復興についても、いまいちイメージが沸かないとか、真剣に取り組んでいる人達に申し訳ない気もしました。もう少し、将来のことを真剣に考えなくては、と思い知らされました。

・頭で考える復興と現実（現状）の違いが分かった。イメージを描くのは簡単だけど、行動するとなると難しいだろうな、と考えさせられた。

・今回このような会を開いていただき、とても有意義に参加させていただきました。もっと年齢が近い人、同じ立場、またはまったく違う場所に住んでいる人とやりたいですね。色々な声を聞き、色々な人に聞かせたい会でした。

・私達、浪江町の為に色々のご心配いただき、おいで下さいまして深く感謝申し上げます。早く除染され、浪江町に住めるようにしたいです。

・現実を改めて考えさせられた。ありがとうございました。

・大変勉強になりました。

・今日はお世話様でした。私達は東雲に来て1年と3ヶ月になります。今日は本当にありがとうございました。これからもお世話になります。

調査・研究・ワークショップ運営

なみえ復興塾

青田 洋平	安部 和子	安部 毅	阿部 義則	石田 健一	石田 全史
伊藤 健秀	牛渡 喜一郎	遠藤 美奈子	大島 信司	大野 重男	小澤 是寛
小野田トキ子	神長倉 正満	亀田 和行	川村 博	菅家 洋子	木幡 愛子
木幡 俊一	今野 幸四郎	紺野 秀子	紺野 芳夫	佐々木 繁子	佐藤 一男
佐藤 尚弘	三瓶 友一	志賀 勝彦	志賀 美樹	志賀 みき子	志賀 雄一
柴田 敬一	末永 福男	鈴木 静子	鈴木 正一	高野 仁久	大坊 雅一
戸川 英勝	朽本 江美	豊島 力	中西 総一郎	長岡 惣一	長橋 明孝
永橋 佐知子	永橋 幸夫	西畑 幹雄	西畑 よし子	西山 孝子	根岸 淑子
根本 洋子	橋本 由利子	畠山 勝	原田 洋二	半谷 秀辰	平賀 祐子
広坂 光弘	藤田 妙子	藤田 政寿	藤田 泰夫	松崎 久美子	松原 茂
松本 信子	三澤 宏道	村形 一恵	森野 輝恵	森野 富二夫	横山 開
吉田 こはく	吉田 政之	渡辺 里見	渡辺 由紀子		

まちづくり NPO 新町なみえ

理事長

神長倉 豊隆

副理事長

新谷 保基

理事

大友 光正	草刈 恒彦	高野 吉隆	原田 雄一	蒔田 嗣夫	矢澤 祥之
蒲生 秀夫	川島 美幸	渡部 和彦			

監事

三浦 一雄	三原 優蔵
-------	-------

スタッフ

赤倉 徹	赤倉 としえ	大友 佳子	草刈 はるよ	原田 アキイ	蒔田 みどり
守岡 竜一	矢澤 浩子				

早稲田大学 都市・地域研究所+都市計画佐藤滋研究室（冊子編集）

代表

佐藤 滋（早稲田大学 都市・地域研究所 所長、理工学術院教授）

幹事

白木 里恵子（早稲田大学 助手）
阿部 俊彦（早稲田大学 都市・地域研究所 客員主任研究員）
岡田 昭人（早稲田大学 都市・地域研究所 招聘研究員）

映像撮影・編集

千葉 景房（早稲田大学 社会連携推進室 常勤嘱託）

スタッフ

早稲田大学 都市計画佐藤滋研究室

荒井 唯香	北岡 亮	木瀬 大輔	下田 瑠衣	菅野 圭祐	関谷 有莉
新津 瞬	二宮 彬	松村 尚之			

芝浦工業大学 志村秀明研究室（協力）

志村 秀明（芝浦工業大学 教授）

倉持 康平 野知 菜穂美

浪江町－復興への道筋と 24 のプロジェクト

発行

2012 年 8 月 16 日

特定非営利活動法人・まちづくり NPO 新町なみえ 二本松市郭内 1 丁目 81 番

電話：080-2800-0653

印刷 / 製本

(有) 3 プリントサービス

編集

早稲田大学都市・地域研究所＋都市計画佐藤滋研究室

事務局

早稲田大学都市・地域研究所 新宿区早稲田鶴巻町 513 120-4 号館 005 室

電話：03-5272-6192 内線：3038